

平成20年度厚生労働省障害者自立支援調査研究プロジェクト

# 地域生活に移行した障害者の 地域における生活実態調査

報告書

## はしがき

私たち長野県障害者地域生活支援研究会は、昨年度（平成19年度）に長野県障害者自立支援課と共同して厚生労働省障害保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）を受託し、平成14年より進められてきた長野県西駒郷の地域生活移行を契機に始まった長野県内における地域生活移行を振り返り、その支援の経過を、障害のある当事者への聞き取り調査を通して検証する調査に取り掛かりました。その調査結果は、「知的障害者及び精神障害者の地域生活支援推進に関する研究」報告書として刊行させていただきました。

聞き取り調査からは、地域生活に移行した当事者が、入所施設や精神科病院での生活に比べて、より満足度の高い暮らしを送っていることが明らかになりました。また、入所施設や精神科病院の問題点についても、当事者の語りを通して示されています。一方、地域生活に移行することによって、全てが解決するわけではなく、当事者は長期間の入所・入院生活から徐々に自分らしい生活のあり方を取り戻しつつある過程にあることも確認されました。また、このような地域生活移行支援・退院支援、移行後の生活支援について、当事者から、一定の評価や支持を得ていると同時に、現状ではいくつもの課題があることも明らかになりました。

平成20年度はそれをもとに、地域生活移行された障害者が地域での関わり（支援者や地域住民によるネットワーク）を通じて、地域がどのように変わってきたのか、当事者がどのような暮らしをするようになったのかを調査し検証していくことに取り組みました。調査の結果、地域生活移行が単に個室と小集団の暮らしだけでなく地域での関わりが極めて重要であり、地域との関わりにより、地域が障害者にとって暮らしやすいような状況になっていくことや当事者の暮らしがより豊かになっていることが明らかになってきました。その実践を今回の報告書でお伝えします。当事者の皆様方や関係する皆様方の今後の取り組みの参考にしていただければ幸いです。

終わりに、今回の調査の実施については、多くの方々からのご協力を得て進められました。まずは、調査にご協力いただいた当事者の皆様方にお礼申し上げます。そして、多忙な業務にも関わらず、調査に直接参画していただいた、または調査の受け入れの労をとっていただいた関係者、関係機関の皆様方にお礼申し上げます。

平成21年3月  
長野県障害者地域生活支援研究会  
会長 小林 彰



## 目次

はじめに .....	3
<b>第1部 地域生活に決まった“かたち”はない.....</b>	<b>5</b>
1) 施設からグループホームを経て二人暮らしへ（女性と男性の二人暮らし） .....	6
2) グループホームで農業を専業にする .....	11
3) 家族と暮らした家に戻って一人で暮らす.....	16
<b>第2部 本当にあるんだ、こんな素敵な地域の暮らし.....</b>	<b>21</b>
1) 一人ひとりの生き方を尊重したYグループホーム.....	22
2) 地域の人巻き込んだ活動がもりだくさんのHグループホーム.....	26
3) オリジナルな生活空間・作業空間をもつ人たちの暮らし.....	30
<b>第3部 人間関係を作るのは本当はしんどいけど、まちで人と接するのはやっぱりいい.....</b>	<b>35</b>
1) 30年間の入院から戻って自由な時間を味わう暮らし.....	36
2) 「名前で呼んでくれる」近所の人に花を見てもらう喜び.....	39
3) 退院して家族との絆を取り戻した .....	42
4) 見捨てない人がいたから、人と接したいと思えるように.....	46
5) つらいことはあっても、今が一番楽しい.....	50
<b>補稿 「そもそも」に立ちかえって、地域生活移行を考えてみる .....</b>	<b>54</b>



## はじめに

地域生活移行とは、入所施設や病院から出て、あるいは親元から離れて新たな暮らしの基盤を地域の中に求めて移り住むという過程ではなく、むしろ地域生活をしていくことで派生する「地域社会とのかかわり」や、暮らしの経験から具体化してくる「どんな暮らしをしたいか」という主体的な生き方に対する支援への入り口に過ぎないとは、数百人の地域生活移行をしてきた当事者から教えてられたことである。

つまり、地域生活移行支援とは、地域生活へ出て・地域社会の中で暮らすことが終着駅ではなく、始まりという通過駅にしか過ぎないのだと。

では、それはどんな暮らしの支援なのだろうか。手がかりは、前年の平成19年度厚生労働省障害者自立支援調査研究プロジェクトに採択されて実施した「知的障害者及び精神障害者の地域生活支援推進に関する研究」報告書の中の「当事者の言葉」と、その「まとめ」からバトンをタッチされていた。

「自分で責任取らないといけない」とは、抑止・制限の意味ではなく、誇りを取り戻し次の暮らしに対する希望と期待がアピールされている。「グループホームは気に入っていますか？」との答えとして「そういうふうに思わなければいけないけどね。(中略)だれでもあると思いますよ。そういう(グループホームではなく)広いところが…ほしいし、のんびりしたいから」には、自己を肯定する意味と積極的な地域生活に対するイメージが吐露されている。報告書の中で、「一つの傾向として、生活の満足感が高い人により、今の生活からより高い希望や要求が出される場合が多かった」との指摘が示されている。つまり、グループホームやケアホーム(以下、GH・CH)の暮らしに落ち着きを感じ満足感を抱く＝良い支援を受けているところほど、一人暮らし、二人の共同生活、他のGH・CHへの住み替えなどがニーズとなって現れ、ダイナミックな支援が展開されていく傾向にあるのだと。

また、「例えばそのカーテンを自分でね。開けたり閉めたり出来るんですよ。朝日がね、見たいときは早く開けてしまうし、(中略)自由自在というか…」と語られる、「何でもないこと」の「権限」への当然な行使と、「(前略)…ようやく自由に出来るようになったのに、どうやってタバコや酒を楽しんでいいかわからなくて」と長期入院で喪失してしまった現代地域社会に戸惑う生活のズレに対して、人生に対する楽しみへの復帰という支援、さらにそのズレを、弱さではなくストレングス(強み)として自分らしさを安心して出していける地域社会であってほしいとする、支援者側が担う課題に気付かされる。

さて、バトンを受けてこの課題のどこから取り掛かるのか？

2回の会議・議論経過は、まとめ部分を読んでいただくとして、議論はつぎのように展開していった。

- ・普通の暮らしとは何か？
  - ・地域生活支援とは何を求めているのか
  - ・地域に溶け込む・地域社会に入り込むことを支援者が望む傲慢さとおこがましさ
  - ・地域生活をされている風景を知ること、支援とは何かに気付ける
- ……と、

ふと立ち止まると、支援とは何か？どこに向かって支援をしているのか？どこを目指そうとしているのか？そもそも人が人をどの方向が望ましいとして支援を組み立てる・そうした発想そのものが、支援者という立場での「驕り・思い上がり」ではないか？そうしたことを考えている支援者自身が、地域に住みコミュニティーの一員としての役割を担っているのか？住居を構えるコミュニティーの事情を知っているのか？日夜遅くまで地域生活支援に飛び回っている支援者、あなたは地域生活をしているのか？

行きつ戻りつした議論は、地域生活支援に誠実に取り組み、そうした支援の場数を数多く踏んできた支援者たちだからこそ、味わい深く・時に迷わせ・何の仕事をしてきたのかと振り返らせることができたのではなかったか。

この調査は、少し先走っているかもしれない。

しかし、地域生活移行支援が組織的・体系的に組み、多くの当事者たちが検証を受け入れて支援者に語り始めた長野県だからこそ行わなければならないと確信した。

協力していただいた幾人かの地域生活の調査に飛び込んだ。当事者が主役となり、支援者が黒子となり、当事者が主体的に「日々のふつうの暮らし」を繰り広げている風景に出会った。「支援とは何か？」少しだけ気付かせていただけたのかも知れない。

H20年度厚生労働省障害者自立支援調査研究プロジェクト調査担当 山田優

## 第1部 地域生活に決まった“かたち”はない

そもそも人の暮らしに決まった“かたち”はない。しかし、“障害のある人の暮らし“といった途端、なんらかの決まった”かたち“を連想しがちではないだろうか。そのように翻ってみれば、”例外“の中に、本質的なあり方があるのではないか。

今回、私たちは、「ちょっと変わった」、「独特」の暮らし方をしている人を訪ねてみた。ここに取り上げる三例は、その一部である。いずれも、私たちの事前の想像を越えた暮らしがあった。

現地調査の後、まず、調査者がその内容をまとめ、最後に[この方(たち)にであつて]と、調査者自身の所感を記した。それを当事者の暮らしを支援したか、あるいは現在の暮らしを支援している支援者に送り、支援者は調査者から受け取った内容について、〈支援者のコメント〉を記した。

調査員が当事者から聞いた内容と、支援者が日常の支援で把握している事実とは少し異なっている場合もあつたり、支援者の支援内容については調査者の推測とは異なる事実もあつたりした。しかし、あえて大きな修正は加えず、そのまま提示することにした。

## 1) 施設からグループホームを経て二人暮らしへ（女性と男性の二人暮らし）

### 男女2人で同居

県営住宅の1室に、70歳代の男性と50歳代女性の2人暮らしのお宅を訪ねた。二人の関係は「同居人」であるらしい。

女性は学齢期から施設に入所し、それ以来3か所の入所施設を経由して、最後の入所施設からグループホームに移ったということだった。男性は、児童入所施設への入所を経験し、退所後に他県で住み込みの仕事をかなり長い間していたが、体を壊して再び長野県内の施設に入所したという。二人は、しばらく同じ入所施設にいたが、入所中は全く接点がなく、たまたま同じグループホームで暮らすことになってそこで出会った。

入所施設からグループホームへ移ろうと思ったきっかけは、入所施設の職員に見せてもらった「テレビ」だった。「アパートで暮らしている人」の「テレビ」を見て、「こんな生活もあるんだ」と、「私もやってみたい」と思ったという。ただ、実際に移ったのは、アパートではなくグループホームだった。

グループホームでの暮らしは、ご本人にとっては少々不満だったようである。

「グループホームは、ここと違って、2人じゃなくて、5人、6人の時もあった。」

「グループホームは、日課があって嫌だった。『留守番してろ』と言われて、外へも自由に行けなかった」

また、世話人の支援にも問題があったことが語られる。

「世話人さんが良くなって代えてもらった。」

二人は、そのことをバックアップの職員に話して、世話人を代えてもらった。その後、職員から、「アパートに入ってみないか」と言われて、二人暮らしが始まっていったらしい。グループホームから今の住居に移るにあたって、女性は、一緒に暮らす人は「この人が良い」と、男性を指名したらしい。

女性に、今の暮らしについて尋ねると、

「こういうところ入りたくて、早くこういうところに来たかった。」

「今は自由にできてうれしいです。前はグループホームは時間どおりにしないと、世話人さんにしかられるから嫌だった。今度は好きなことが出来るからうれしいです。」

と、笑みを浮かべて語ってくれた。もう少し、今の暮らしについて聞いてみよう。

## 仕事場まで迎えに行く（男性が女性を）

朝は、二人で仕事場に出かける。女性は就労センターに、男性は近くの「福祉ショップ」へと、別々の場所で仕事をしている。

男性は仕事が午前中のみなので、一旦家に戻って昼食を取った後、「3時に、(女性の職場へ)お迎えに行く」ということだった。女性は、「朝一緒に行ってくれるんです。お迎えにも来てくれて」と少し照れくさそうにしながらも嬉しそうだ。

## 二人で出かける

「新聞のところで、そこで見んです。それで、電話して」

「松山千春とかのね。ああいう人のコンサートはすぐいっぱいになるんだよ。」

二人は、時々ガイドヘルパーを使って出かけるということだった。出かける先は、映画やコンサートが多い。新聞の広告を見て、支援者にチケットを取ってほしいと連絡を入れ、取ってもらう。人気のあるコンサートの場合、頼んだ支援者がすぐ動けないと取り損ねてしまうこともあるらしい。

コンサートや映画以外にも、時々二人でタクシーを呼んで、近くの温泉旅館に出掛ける。温泉で、1日のんびりして帰ってくる。

## 「歩いていると知り合いになる」

二人は、地域の中に知り合いもでき始めているようだ。ヘルパーや支援者と一緒ではなく、二人だけで出掛けて帰り道に迷った時、偶然通りかかった知り合いに助けてもらったこともあるようだ。

地域で根を下ろして暮らすと、日常生活の活動を通じて、取り持たれる人間関係は広がってくる。どこかで接点のあった人と、偶然別の場所で接点を持つことになり、人間関係が広がり深まったりしていくことが推測される。

二人は、それを「歩いていると知り合いになる」と言う。

## 自治会の「組長」を経験する

二人は、今の住居に住み始めて2年目に入った頃、「組長」の役目を経験した。男性の話によると、「4階のお父さんが、やっってくださいと言ってきた」そうだ。

仕事は、同じ県営住宅8軒分のお金の取りまとめや、「配り物をポストに入れていく」こと等だった。初めは支援センターのスタッフや、ヘルパーの支援を受けながら、1年間「組長」

の仕事をこなしていった。男性は、「お金預かるから大変だ。集めて集会所に持っていった」と話し、女性は「やって良かった。後楽々した（役目が終わって）ホッとした」と、そして「知り合いが増えた」とも話していた。

「たまにね、煮物を作って持ってきてくれる。大根煮物とか。」

「そのお返しに、お菓子とか持っていく。」

自治会でのお付き合いも続いている。自治会の総会には必ず出て、「一杯飲んで」来るということだった。その「役目」は、もっぱら男性が担っているという。

最近、上の階に視覚障害のある女の子と母親の世帯が引っ越してきた。母親から「よろしくお願いします」と言われたこと、その子が手すりをつかみながら県営住宅を移動していることを話しながら、支援が必要な新しい入居者を温かく受け入れているようだった。

## なじみの散髪屋さんが送迎をしてくれる

二人は、グループホームに住んでいたころの馴染みの散髪屋さんに今も通っている。散髪屋さんの送迎付きである。

「ほんとうはいけないんだけど、送ってきてくれる」

「自分たちで、行かないとだめかなと思ってるんだけど。悪いなあと思って。」

二人は、しきりに「送ってもらって悪い」と言うが、散髪屋さんとしては、毎月、決まって二人で来てくれるお得意さんになっているようだ。

## 「二人で住んでよかった」

二人は最後に、「二人で住んで良かった」と語ってくれた。

「具合が悪い時がね。一人だと不安だし。」

たまたま、調査員が伺った時、女性はやや体の具合が悪くて熱があるとのことだった。しかし、今の暮らしの楽しさを矢継ぎ早に語ってくれる姿からは、暮らしそのものの楽しさがにじみ出ている。

## この方達に出会って

お二人の住まいに伺って、数日たってから、便箋数枚にいっぱい文字が書かれた手紙が届いた。お話を聞いた女性からだ。生まれつき手に障害があったこと、子どもころに施設に入所したことから、今の住まいに至る経緯が丁寧に認められていた。もう一度、お話を聞かせて欲しくなって、2ヶ月後、再びお二人の住まいを訪ねることにした。

二人は私たちを、お菓子を用意して迎えてくれた。前回のお話と、手紙で教えてくれた内容を、もう一度確認しながら聞いた後、前回と同じように二人で暮らして良かったことを聞いてみた。

「自分が出来ないことを、助けてくれるから。」

「お風呂が少し古くて、大変で、助けてくれる。」

手に障害がある女性は、今の住居のお風呂に入るのに苦労していることを洩らした。同行した支援者が、「新しく、入りやすいお風呂があるところに引っ越してみる？」と聞くと、「いいところある？」と、まんざらでもない感じだった。私は、「そんなもったいない。せっかくご近所さんとも仲よくなったのに・・・」と、思わず出そうになった言葉を飲み込むのに必死だった。そして、「いかん！いかん！それこそいらんお節介だ」と自分を戒めつつ、つい自分の感覚や価値観で見ってしまう自分を意識した。

## <支援者から>①

女性は、以前の入所施設にいた時から、既に職場実習を経験したりしていたので、グループホームに移行する前に入所した時から、「ここを卒業して地域で暮らせるようになろうね。ずっと見守っていくから。」と話していました。

後に、「典子は今（両手の無い子が頑張っで足で何でもできるようになっで）」という映画を見る機会があっで、彼女自身も半身が不自由なことから、主人公の頑張りに感銘を受けた様子で、「自分も頑張ろう。」という気持ちを強く持っでました。

その後、市内の作業所や企業での職場実習をし、その間に自活訓練で、持っで出る弁当作り当番なども積極的に行いました。

平成5年、初めてのグループホームを開設するに当たっで、そこに入居することになりました。

また、女性は、そこで暮らしているうちに、今同居している男性と一緒に暮らしてみたいという希望を口にするようになりました。男性の方も、入所施設にいる時から彼女に引かれ、何くれとなく傍らにいて用足しをしてくれていました。公営住宅の申し込みをするうちに、県営住宅の空きの抽選に当たり、生活支援センターの支援を受けて、二人で暮らすことになりました。

男性は、長年親戚の叔父さんの下で職人の下働きの仕事をしてきましたが、脳血管障害で入院し、回復して入所してきました。

そのうち、彼女に好意を寄せるようになり、何かと用足しをするようになって、二人で一緒にいることも多くなっていました。

お二人とも、保護者の方のご理解があり、現在のような形での暮らしに、異論は出されませんでした。

お二人を担当する期間が結構長かったので、現在のような暮らしが少しでも長く続けられることを、いつも願っています。

## <支援者から>②

二人の県営住宅での生活が始まった頃は、不安から常に電話があったり、すぐに対応しないと怒っできたりきていたようです。ヘルパーも毎日入り、フル支援してきたのを、ケア会議などで、少しずつ自分たちでできることを増やしたようです。

本人たちがいろいろな経験を重ね、段々と支援も薄くなり、ごく自然に今の生活ができています。

近くに住む二人の兄弟たちが、何くれとなく立ち寄っでくれたり、県営住宅の“役”をやっで知り合っでた人たちとの交流があったりします。

二人の生活は、我慢しなければならぬことも多いようですが、二人で助け合いながら、楽しく生活しています。普段贅沢をしている訳ではありませんが、自分たちの楽しみや好きな食べ物にはお金をかけ、うらやましい生活です。

## 2) グループホームで農業を専門にする

### 一見したところ普通の農家～「あんた普通のおっさんだ」

グループホームを訪ねての第一印象は、「あれ？普通の農家みたい？」だった。グループホームの車庫いっぱい、あらゆる農機具が置いてある。耕運機や車輪のついた大型の噴霧器、除雪機まである。後から聞いたところ、耕運機は畑にも置いており、全部で3台あるそうだ。庭先には、ブルーシートをかけたドーム型の野菜の保存庫があり、白菜がたくさん保存されている。先程の車庫にも、立派な玉葱がぶら下がっている。

庭先の菜園には、キノコの栽培に使った菌床がきれいに撒かれている。近くのキノコ農家から分けてもらったそうだ。まさに、何処にでもありそうな普通の農家そのものである。



(車庫の中の農機具)

農機具は、近くの農協で中古品を見繕ってくるのだという。農協には、昔からの知り合いもあり、購入することを決めてから支援者に言うのだという。確かに、農業をやったことのない支援者が相談を受けてもどうしようもないだろう。

畑はホームから自転車です数分のところにあり、税金も払っている。農作物は、近くの「100円店」で販売することもあるという。

一人のインタビューアールが、思わず「あんた普通の（農家の）おっさんだ」と。訪問した者はみんな同じ印象を持ったようである。



(庭先にある野菜の保管庫を見せてくれる)

## 頼りにされる

このホームは、男性ばかり4人の居住者がいる。この男性は、ホームの中でも外でも、お世話役のように、他の利用者だけでなく、支援者からも頼りにされている。

以前は、キノコ栽培の事業所で「かきだし」の仕事をしていた。そこには、同じホームに住む自閉傾向のある人も勤めており、自分の仕事の他に、この人の仕事の段取りまでしていたらしい。話を聞く限り、どう考えてもイメージされるのはジョブコーチである。

その後、年齢的なこともあって、この男性が仕事をやめた後、自閉傾向のある人は、男性による的確な段取りがなくなったためか、上手く仕事に取り組めないことがあったり、職場に足が向かないこともあるようになってきたりすることもあるという。今でも職場からホームに、当人が出勤していないと連絡が入ると、当人が立ち寄りそうところを探して、出勤出来るように促してやるそうだ。

この男性の部屋は、一階の共有スペースである居間の隣にある。ホームの中でも最も人の動きの激しい場所で、人の動きが気にならないか聞いてみたが、本人は「うるさいけど気にならない」そうだ。

## 地域の「組」の仕事

男性は、このホームの中で、地域の自治組織である「組」の仕事を中心に担っている。「川掃除」や「草刈り」、「公民館の掃除」など、得意そうなものである。そんな時は、車庫に保管してある機材を担いで出掛けていくのだそうだ。そして、終わった後には、打ち上げで「一杯やる」のだ。

この地域では、正月など行事のときには公民館などに集まって「一杯やる」のが慣例であるらしい。長野では、比較的古い地域によく見られる習慣である。そんな時は、「行かないと気を使って（仕出しの料理）を持ってきてくれて悪いから」出席するのだという。

## 「生家」には泊らない

生家は、ホームから自転車でする30分程度のところにあるらしく、お盆や正月に日帰りで行ってくる。生家には、「自分の部屋もある」そうだ。それでも、「生家には泊らない」のだという。生家には、「兄弟の家族が住んでいる」ということで、ご本人にとっては、ホームが自分の最も落ち着ける居場所になっているようである。

## この方に出会って

調査を終えて、この暮らしを本人自身が組み立てられるように支援した支援者がいるのではないかと思った。畑づくりができるように、本人の所有する畑に通える場所にホームを用意し、そして農機具を収納しておけるスペースの確保など、偶然に出来上がったものではないのではないだろうか。

入所施設から地域の住まいへ移る際、本人の希望を聞き出して、それを本人自らが実現できるように、本人に寄り添って支援した支援者がいるはずである。私は、その支援者の話も聞いてみたいと思った。



(立派な玉葱がきれいに束ねられて保存されている)

### <支援者から>①

声のかすれた彼は、平成6年に入所施設からの地域移行の一番手としてオープンしたグループホームへやってきました。入所施設ではあまりにも「馴染まない」普通のおっさんだったから(?)。という理由・・・。

ホームでは、言葉が上手く話せない女性利用者の兄貴役として、利用者同士の調整役として、また、世話人や支援者への「代表交渉役」として活躍してくれていました。日中は、時間を見て、20キロ離れたふるさとにある畑(?)や、入所施設に自転車で通っていたらしい(良くは判らなかった・・・)。

平成9年、彼のふるさとで新たにグループホームを開設することになり、「どう!AN市に新しいホームができるんだけど移らない?」と誘った・・・が、「ここがいい!!!!・・・」とかたくなまでの意思表示。「なんとか・・・お願い・・・!!!」とビールを持って懇願の1週間。「畑もあるしサー・・・。施設にも近くなるし、〇〇ちゃんもいるし・・・。」と。ようやくオープンするホームを見学してくれる気になりました。

そして見学・・・感想は「畑に近いしここもいいかー。」と納得(私たちの思いを汲み取ってくれた?)。普通のおっさんの暮らしがこのホームで始まりました。真相はこれだけです。

おっさんが、移った先のホームを囲む社会の文化や慣習に極自然に溶け込み、そこでの人の繋がりや地域が、普通に出来上がってきただけなのです。私たちは何もしていません。慣れ親しんだ地域へ行っていただいただけなのです。

## <支援者から>②

彼との出会いは、本人が地域で普通に暮らしていたのですが、生活を支えてくれる人が困難になったため、入所施設に入ってきたところからでした。

一見したところは、ちょっと年をした「普通のおじさん」というイメージで、その時すでに地場産業である、「えのき工場」へ働きに行っていました。彼の仕事を続けたいという思いを受け、入所施設から自転車で仕事に通いました。とにかく、どこへ移動するにしても、基本は「自転車」です。バスなどの公共機関は使いにくいのです。

施設で生活し、地域で働いていくうちに「グループホーム」という制度を法人で実施するに当たり、真っ先に引っ越しを決めたことで、再び彼の生活は地域に戻って行きました。ホームは、施設から北に10Km以上離れた所でした。ホームでは、本人の自転車がなかったため、バスと電車を乗り継いで、今までのきのこ工場に通いました。

その後、別のグループホームが生地に近い所に開所することを機に異動したのが、今の生活の場です。

今の生活の場に引っ越したのを機に、生家で暮らしていた頃の姿が再び戻ってきました。それは、きのこ工場で働きながら自分の畑で農作物を作るという、ごく普通の生活です。彼は、バスにうまく乗れないが、経験の豊かさから農作業についてはプロでした。

畑がホームから近かったこともあり、休みの日には畑で野菜を作り、ホームの食卓を賑わせてくれました。ホームの食卓に並ぶには、食事を作ってくれる世話人さんの理解もあったからです。取れたての野菜を上手に使った料理は、一緒に暮らす利用者の方にも好評でした。

彼は、「えのき工場」で働きたいという思いを持ち続けることで、60歳の定年後も電動自転車で、パートとして働きました。今は、えのき工場には行っていないですが、生活する意義を求めつつ、周囲から喜んでもらえる野菜作りに精を出しています。

## <支援者から>③

本人は今、少し古びた寒い農家のグループホームで普通に暮らしています。

今でも、ホームで会うと、「どこかホームの近くにきのこ屋ねえかや。」と聞かれます。遠くのきのこ屋からも声を掛けられているようですが、根っからの働き者です。

法人から、「そろそろホームを卒業して、暖かいアパート生活でもしたらどうか」と声を掛けられていますが、本人はどこを選ぶのでしょうか。

どこで生活するにしても、周りが心配するよりも、本人が一番近隣に馴染んで、今までの畑仕事ができる暮らしを作り上げていくような気がしています。

今のホームでの生活が、“写真的”には本人に一番似合っているように見えますが、今後の生活は、本人がどこを選んでいくのでしょうか。また、私たちを良い意味で裏切っていくのかなと思います。

### 3) 家族と暮らした家に戻って一人で暮らす

#### 家族と暮らした1軒屋に一人で暮らす

女性は、現在30代前半で、2階建ての1軒屋に一人で暮らしている。両親が早くに亡くなって、20歳を越すまで祖母と二人で暮らしていた。養護学校卒業後、自宅からきのこ工場に通って、「かきだし」の仕事をしていた。

その後、一緒に暮らしていた祖母が亡くなり、グループホームへ入居し、20歳代後半はそこで暮らした。グループホームで4年ほど暮らしたが、「(家族) みんな暮らしたあの家に帰りたい」と、1年半前にこの家に戻ってきた。同行してくれた支援者によると、彼女がこの希望を訴えたことは、支援者達にとっては衝撃的な出来事だったらしい。

#### グループホームは、「おばちゃん（世話人）が嫌だった」

グループホームは、アパート形式で、玄関を入れれば自分の部屋だった。食事の時だけ、一度外に出て、共有スペースに集まって食べていた。

グループホームは、「自分の部屋があって良かった」そうだ。ただ、「(世話人の) おばちゃんが嫌だった」ようで、「ご飯はみんな黙って食べた。嫌いなものも食べた」と語った。

#### ヘルパーの支援

日常生活は、週に4回、ヘルパーが訪問し食事作りや掃除などの支援を受けている。食事には少し好みがあって、野菜やサラダが好きだが、かけるドレッシングにはこだわりがあるらしい。ヘルパーには、メーカーを指定して買ってきてもらっているが、時々「違うのを買ってくる」ことがあって、

#### 近隣の人の支え

彼女が家に帰ってくることについては、親類縁者には少し抵抗もあったようだ。しかし、戻ってきてからは毎日のように様子を見に来てくれるそうである。ただ、当の彼女は、「うるさい」と少し嫌そうである。

グループホームから自宅に戻る際には、何度か一人で泊まりに帰って来たそうである。初めは、一人寝るのが「少し怖かった」ようである。

しかし、この家の近所には、彼女が小さい頃からお互いによく知っている人が多い。「食べ

物をもってきてくれたり」、不安な時に助けてもらったりしている。どうしようもなく、一人が不安な時は、「近所のおばちゃんの家泊めてもらった」こともあるらしい。

## バスを乗り継いで職場に通う

平日の昼間は、パン工房に通って仕事をしている。

彼女の朝は早く、7時に家を出て職場に向かい、徒歩とバスを2本乗り継いで1時間半程かけて職場まで通っている。3時半まで仕事をして、またバスに乗って4時半頃帰宅する。

でも本当は、以前勤めていた「きのこのかきだし」の仕事の方が良いそうだ。

## 休みの日は折り紙を折る

休みの日は、どうしているのか聞いたところ、「これをやってる」と、こたつの上にある折り紙の山を指して言った。完成すると丸いボール状になる折り紙の部品が、箱いっぱいになっていた。よく見ると、部屋には完成したボールがいくつか置いてある。

かなり精密な折り紙で、相当の技術と手間がかかりそうである。誰に教えてもらったのかと聞くと、「おばあちゃんから教えてもらった」そうだ。彼女の暮らしは、一時期のグループホームでの暮らしを挟んで、再び「おばあちゃん」と一緒に暮らしたあの暮らしに戻ってきたのだと私は思った。

## 「ちょっとさびしい」

彼女は、今の暮らしは、「ちょっとさびしい」とも語った。「グループホームは自分の部屋があって良かった。」と、「あれあれ？嫌だったんじゃないの？」と聞くと、「おばあちゃんは嫌だった」と、でも「自分の部屋があって良かった」とも語った。

そして、誰かと一緒に住みたいが、「住みたい人がいない」のだと言う。「友だちの〇〇さんというダウン症の人が好き」で、一緒に住みたいと思ったけど、「引っ越してしまった」らしい。

## この方に出会って

自らグループホームから出て、かつて家族と暮らした家に戻った若い女性がいると聞いて、私は勝手に逞しく活発な女性をイメージしていた。しかし、伺ったお家で迎えてくれたのは、イメージとは違って少しかよわそうな女性だった。

初めて伺った時、彼女は風邪でかなりしんどそうだった。なんとなく大丈夫かなと思っていたが、話を聞くうち徐々に、か細い声の中になぜだか折れない芯のような強さを感じていた。「グループホームも良かった」と、一人暮らしの「さみしさに」少し揺れているように見せながらも、自分の暮らしを自分でしっかり選び取ろうとしているようにも見える。彼女の暮らしの中には、かつて家族と暮らした暮らしがしっかり息づいているし、生まれ育った地域の中にしっかり根付いた暮らしが貫かれているようにも思う。

## <支援者から>①

グループホームが1つ2つと増え始め、気がついたら10ヶ所になろうとしていた矢先（平成15年ころ）、ふとグループホームで暮らしている人の思いを聞いてみたいと思うようになった。スタッフ2人と1軒ずつまわり、一人ひとりにインタビューしたのである。

「この生活はどうですか？」との質問の中で「施設よりはいい。」「ここはいい。」「一人の部屋があるからいい。」という答えが多く返ってきたのだが、唯一人、彼女だけが違っていた。

「ここはいいですか？」の質問に小さな声で下を向きポツリと「家（実家）に帰りたい。」と言つぷやいた。とても寂しい口調であった。

なぜ帰りたいと願うのか支援者は本人に率直に聞いてみた。

アパート形式のホームで完全個室を保たれているが、食事のときだけはみんな一緒であった。男女混合のホームで人間関係がじょうずではない彼女にとって、食事の時間がとても苦痛だったようだ。また、隣からこぼれる声や音がとても気になったとのこと。そんな思いがどんどん蓄積されて、帰りたいという思いが一杯になったのだと察した。

私たち支援者は、それを聞いた以上受け止めようと思った。

数年前、彼女がグループホームで生活することになった経過だが、祖母との2人暮らしの中、本人を心配しつつ祖母が亡くなり、本人が独りになってしまった。心配した叔父がグループホームの入居を勧め、本人もいくつかのホームを見学し、アパート形式のホームならと納得の上、生活がスタートしたのである。

当時、生活支援センターも細々とだが地域に根付き始めていた時であったが、地域での安心よりも施設・グループホームの安心感を選択されたように思う。

しかし、本人からの家に帰りたいという思いに対して、今なら地域の資源をフルに活用し、実家での生活を望む暮らしを後押しできる、そんな地域だと確信し、当時グループホームの選択をした本人の叔父に時間をかけて、家に戻りたいという本人の思いを受け入れてもらった。彼女の声聞いてから1年という時間をかけ準備を進めた。

その後、本人に入ってもらい何度もケア会議を開催し、少しずつだが丁寧に進めてきた。  
実際、彼女の生活支援を応援する中で、制度をフル装備で整えたが、本当に彼女を支えてくれたのは、地域の近所のおばちゃんたちだった。

移行した当時、家に帰ってきたという気持ちから、ここで独りで暮らすと実感した時にホームシックにかかった。寂しさからか電話が頻繁になったが、今は必要な要件のみに減っている。

そして、独りで生活するという不安を取り除いてくれたのは地域の方である。ゴミの回収日には本人の家に寄って「今日は可燃ゴミだよ。」と声を掛けてくれる。お祭りの日にはごちそうを作って持ってきてくれる。田舎の付き合いのお茶飲みに寄ってくれる。

彼女が戻ってから、祖母が生きていたような近所付き合いの光景が、またスタートしている。それは彼女が唯そこで暮らしているからの自然な光景なのである。

私たち支援者は、「あの時、聞いてしまった。」という連帯責任のような関係でここまで来たが、彼女がしっかりこうしたいという意志を示してくれたおかげである。

## <支援者から>②

本人の生家での生活がスタートできるように、一人だけでなく、関係者がチームを組み、役割り分担して支援してきました。

本人は、好き嫌いの激しい、ある意味我ままですが、地域生活が継続できるように、本人ができるところは、できるだけ本人にやってもらいます。そのため、我ままには付き合いません。本人が、一人ひとり対応する人に違うことを言ってすり抜けようとするところは、さりとかわし、本人とのケア会議で決まったところを曲げないようにしています。

今もいろいろ言うところではありますが、本人のニーズと我ままを見極めつつ、少しずつ支援の手抜きをしています。

独り暮らしは寂しくなる時もありますが、今は、近隣や事業所、ヘルパー、ボランティアなど、インフォーマルな方にも見守られ、普通の暮らしができています。

[コラム] “地域で生活する” って言葉

「〇〇さんは、今△△に住んでいるんだね。」という会話は日常の中にある普通の会話です。そして、“地域で生活する” って言葉に違和感を持つのは、私だけではないと思います。

私の周りには、「趣味の油絵の材料を画材店にバスに乗って買いに行き、学生時代よく入っていた喫茶店でカレーライスを食べ、グループホームの仲間の人数分ケーキを買って帰り、みんなでネスカフェをいれてお茶を楽しんでいる、Aさん」「ふらっと旅に行きたくなり、新聞の折り込み広告にあったツアーパックに申込み、上高地や沖縄にボストンバック一つ持ってハンチング帽子姿で旅行をしてくるBさん」「東京ドームでの日本シリーズを見たいと、世話人さんに頼んでインターネットでチケットを取り、特急あずさに乗ってビジネスホテルに泊まって巨人の応援をしてきたCさん（残念ながら巨人の負けでしたが…）」「お正月の初売りでユニクロに行き、作業所の工賃でいつもお世話になっている姉さんにセーターをプレゼントしたDさん」「毎日、新聞の株欄をチェックして時々株を買ったり売ったりして楽しんでいるEさん」「駅前のメイド喫茶へ行って見て、一杯1,000円もするコーヒーを飲んできて、ちょっとにやにやしているFさん」などなど、日々の暮らしの中に楽しみを入れている方々がいます。どの方も、精神科病院に長期に入院していたことがある方々です。おそらく、こういうことは入院中には考えられなかったことでしょう。

“地域で生活する” というのは、“施設入所・病院入院” に対する言い方かもしれませんね。でも、人が日々を暮らしていくことは、何かに対しての行動でなく、その人らしい楽しみを持ってそこに住んでいることなのだと思います。当たり前のことを取り戻すことが、どんなに尊いことかと感じます。

## 第2部 本当にあるんだ、こんな素敵な地域の暮らし

入所施設から地域生活に移行した後、その生活が地域に根付いていくためには、どのような支援が求められているのだろうか。

まず大前提として、一人ひとりの生き方が大切にされた支援が行われることが重要であることはいうまでもない。しかしそれは、「ふつう」に地域で暮らすことをイメージしたものでなくてはならないし、支援者が全てをお膳立てするやり方では実現できない。その上で、地域との橋渡しする支援が求められている。これ自体は、きわめて単純・シンプルなことのように思えるが、“障害のある人の暮らし”がこびりついて意識のまま考えると、その本質的なあり方にせまることは意外とむつかしいものである。

ここに示した例は、いずれも地域生活移行に先駆的に取り組んできたグループホームや事業所である。現在では、かなり地域の中に溶け込んでいる印象を受けるが、手探りで地域での暮らしのあり方や、支援のあり方を模索してきた過程の一端もうかがわれる。

ここでは、調査員が、グループホームとその近隣に滞在して、当事者の生活や地域の活動に参加した。調査者自身が、当事者の日常生活に近い場所から体験する試みであった。

## 1) 一人ひとりの生き方を尊重したYグループホーム

Aさん(60歳代)、Bさん(70歳代)、Cさん(50歳代)共に、長年入所施設での生活を経験し、7年ほど前から5人のグループホームで暮らす。

### ・Aさん

#### 「家で仕事がしたい」

「ここでお仕事されていると聞いていますが、見せていただけますか」とお願いすると、プラスチック製品のたくさん入った箱と特殊な虫眼鏡(2,800円)や、帽子タイプの眼鏡(4,500円)など不思議な装具を持ってくる。そして実際に不良品をどのように見分けているのかを実演。その時は、顔が真剣だった。今の仕事はプラスチック製品(車の部品)の検品作業。支援者によると、グループホームに移ってきた時、「お昼は何をしたいですか」と聞いたところ、「もういっぱい働いてきたので家で仕事がしたい。3日だけがいい」と言われ、外の仕事も紹介したが、やっぱり家でできる仕事が良いとのことで、この仕事になった。

最初の1年は、支援者が一緒に検品したり、検品の受注、納品、給料の受け取りをやっていたが、いつのまにか、Aさんが自分でやるようになった。支援者が「あの頃は温室すぎたな」というと「ああ」と笑う。「20,000円もした」一輪車を自分で購入。しかし、「いっぱいの時、落ちてしまう」(納品時に、いっぱい載せると製品が落ちてしまう)経験をし、その後、「54,000円もした」台車を自分で購入。荷物が載せやすい様に、紐が釘で止められていた。「これならいい」と笑顔で説明。今は近くの工場まで自分で歩いて納品に行っている。

家で仕事をすると閉じこもり勝ちになるのでは、と誤ってしまい勝ちだが、Aさんの場合、仕事に必要な眼鏡や台車などの購入、近くの工場までの納品に行くなど、自分が望んだ仕事であれば、どんどん工夫して地域にでていっていることがわかった。

#### 「3日だけでいい」

さらに「3日だけがいい」(3日だけ活動したい)という要求に対しては、他の日に何もしないよりはだれかに来てもらおうということになって、週に1日は、手芸の先生にボランティアで来てもらっている。材料費だけを利用者は負担している。その活動時に作ったクリスマスリースとコスモスを見せてもらう。今は手芸もやるが、食事にでかけたり、ドライブ、釣りなどの外出をしたり楽しいことをしている。メンバーは隣のグループホームの人と合わせて3人。

日中活動というと、利用者が外にでていくことを考えがちだが、「外部の人に来てもらう」というのも一つの選択肢だと気付かされた。それにしてもよくこんな素晴らしいボランティアの人を支援者は探して来れるなあ。「手芸」という一見したところ、福祉領域と関係のない人とのつながりを持っておくことも支援者には求められている。

## 「もう酒はやめた」

「医者に言われて、もう酒はやめた」そうだが、以前は世話人（男性）と晩酌をしていたこともある。また地域の行事にも参加していた。お酒を飲み過ぎて一人で帰れなくなり、近隣の人にホームまで送ってもらうこともあったらしい。支援者は、グループホーム立ち上げの時期には、毎年元旦にある地域の新年会に2年連続で参加して、住民とつながりをもってきた。この地域は高齢者が多く、自治会の行事の参加者が減少していたこともあり、自治会に利用者が参加すると歓迎してもらえた。公民館での催し、運動会、ハイキング、清掃などよく行っていた。今も年に1回は、となりのグループホームと一緒にバーベキュー大会をし、自治会の人も来て、30人から40人の会になる。

立ち上げ期に支援者は、地域とのつながりを作るために、支援者自身が住民との関係づくりをし、その後は、本人たちや世話人が地域とのつながりを深めていた。

### ・Bさん

#### 「いつかは美術館に飾ってもらいたい」

支援者が「このごろ絵を描いてないんだよね」と言うと「だって寒いから」と言う。絵を描き始めたのは、「〇〇さん（職員）に教えてもらった」のがきっかけ。浅間山を描いて2回入選した。「小諸に美術館があって、賞をとった人の絵を飾ってもらえる。」夢は、「小諸の美術館に飾ってもらいたい」が、「そこまで絵をもっていくのがたいへんで、まだ出したことがない」と言う。

ホームの別棟にBさんのお金で建てたアトリエがあり、入らせてもらう。「写真をとっていいですか」と言うと「どうぞどうぞ」と言い、賞状と一緒に何度もポーズをとる。そのうち、絵が立てかけてある奥から、包装されたものをだしてきて、ひもをほどき、絵をみせてくださる。「入選したときの。これはいいわ」と自分で誇らしげに言う。70歳をすぎた今も絵画活動をする日中活動に月曜日から金曜日まで毎日通っている。

### ・Cさん

#### 「小さい時にね、お母さんが作るの、ずっとみてたからね」「私お料理大好き」

Bさんにお話を伺っている間、台所でCさんが、野沢菜入りのおやきを蒸している。右手に麻痺があるそうで、左手でだけで、うまく生地を伸ばし、野沢菜を切り、切った野沢菜を生地の中に押し込んで丸めている。あまりに見事な手さばきに思わず、「どこでおぼえたんですか」と声をかける。「小さい時にね、お母さんが作るの、ずっとみてたからね」と言う。その時自分でやったことはないとのこと。施設を出て、ご飯を作る機会があって、やってみたらできたとのこと。「私はこうゆうのが好き、一番得意なのはコロッケ」と言う。「めんどくさくないですか」と問うと「全然。私お料理大好き。売っているお肉のコロッケは嫌い。私はいわしの

缶詰をいれるのが好き。おいしいよ。」と言う。蒸し上がったので、私に「どうぞ」と1個くださる。私が「これ（野沢菜）油が入ってますよね。とてもおいしいです。」という「〇〇（作業所）でもらってきた野沢菜を切って、油でさっと炒めて、それを冷蔵庫にとっておくと、30日ぐらいもつよ」と言いながら、冷蔵庫から野沢菜のタッパーを取り出して、小皿2つに盛り、私とBさんに爪楊枝をつけてだしてくださる。その後、たくさん蒸し上がると、大皿におやきをいれて、「さあ食べよう」といい、私にも「どうぞ」と勧めてくださる。BさんとCさんはそれが土曜日の昼ご飯。

Cさんはインタビューの対象者ではなかったが、あまりの良い手さばきにただただびっくり。小さい頃の記憶を再現して作っていると聞いて、もう一度びっくりした。

#### Cさんの作ったおやき



#### Yグループホームの人たちに出会って・・・

5人のメンバーで生活をしているが、日中は、5人とも違う場所に通っている（1人は前述したように家で作業）。夕方になると、ホーム内で作業をしているAさんの元に、他のメンバーや世話人が来てにぎやかになる。それぞれの人が、やりたいことをやりたい形で、やりたいスピードでやっておられたのが印象的だった。インタビューの間も、他の人もいろいろコメントをしてくれる。なごやかな雰囲気が流れていた。それを支える支援者のきめ細かい配慮をいっぱい感じた。

一番思ったことは、いろんな背景があるのだろうが、なぜこの人たちが長年入所施設で生活をしなければならなかったのか、「全くわからない」ということ。

## <支援者から>

出会いは、グループホーム立ち上げのオファーから始まったんですよね。

振り返ってみて、本人は良くわからないまま地元から離れた施設に入ってしまった中で、「知り合いがいる地元に戻ろうよって」言葉が、どんな響きだったのでしょうか。

地域生活って、幾つかの支援ツールというか、支援ルールというか、揃えてから「さあーどぞ」の世界で支援が始まるような時もあったけど、頑張ってきた年月を考えたら「次はどこへ通いますか？」なんて言葉は出ないですよ。

始まりは「仲良くなってね」からかな。お薬が必要ならどこの病院へ行こうか？せっかくあそこに行くなら、あそこに寄って来ようか？なんてね。「もう働きに行くのは今までやって来たしね。ここでいいよ」ってご本人の言葉が全てを要約してくれたかな。とにかくたくさん話したかな。当時は意向調査なんて言葉を使って、今となると恥ずかしい限りですね。当たり前なのにね。

仕事をホームに持ち込むのは結構大変でしたよ。何せ日中活動の場のような支援者がホームに存在するわけでも無かったし、受注や納品や検査や支払や、どうしようという感じで動き回っていたけど、納める品物からも本人の丁寧さが伝わって行ったんでしょうね。ご本人に委ねてみませんか？の発想が施設職員の自分には足りなかったと思います。社長さんとも仲良くなって、そしたら自分で仕事貰って来ていましたね。納品グッズや検査用具もいつの間にか増えましたね。工賃だって当然ご本人が貰って来ましたから、使い道も楽しまれたんでしょうね。新たなグッズが登場する度に、食卓を盛り上げるテーマにもなっていたことも事実だし、 unnecessaryな助言もなく楽しませてくれたかなって感謝しています。

そんな生活ぶりの隣には、最年長の画家さんもいました。新築ホームのお部屋には、油絵を描くスペースは限界あって、「アトリエ建てちゃおうか？」が始まりでした。

でも、施設管理のお金は、ご家族の皆さんのご意見やご了解も当たり前のように必要で、お願いしたことを思い出しますね。何十年もの施設生活で貯めたご本人の預金のほんの一部なのにねって思いながらもね。でも現実には至りましたね。

ホーム生活開始後は、地域の絵画教室に通って、写生日には教室の方の車でお出かけする機会も作っていましたね。写実的な絵画教室のムードがあったのか、今は通所施設に通っていますが、自由に思い通りアート活動が行える雰囲気が欲しかったんですね。

お得意の調理をご不自由な体でみんなに振舞ってくれた紅一点のあなたにもご馳走様って言いたいです。皆さんの力は、発揮できずに持っていたんですものね。

支援者的には自治会への加入やホームパーティへのお誘い等、当初は地域に仕掛けたけど、結局のところは皆さんが地域の方と知り合って、時には地区の宴席で飲み過ぎて送ってもらったなんてエピソードもありましたけど、「送って貰えて良かったね」って笑いで締めくくれる受け止め方を皆が共有していたかなって思います。

## 2) 地域の人も巻き込んだ活動がもりだくさんのHグループホーム

いずれも入所施設での生活経験をもつ人たち6人と、そのうちの一人の実父の計7人暮らしのグループホーム。年齢は30歳代から60歳代と幅広い。

### ・Dさん (30歳代、女性)

#### 「楽しいことは、歌うこと」

「楽しいことは、歌うこと」。Dさんは、地域のあるコーラスサークルに入っている。「とても楽しいよ」と何度も言う。あまりに「楽しいよ」と言われるので、興味をもち、1月下旬、午後7時半～9時、実際にDさんと一緒に、コーラスサークルに参加した。40人ぐらいの参加者がいた。障害のある人三分之一、母親らしき人三分之一、地域の人三分之一くらいだろうか。公民館や養護学校を借りて月に2回、夜の7時半から1時間程度で行なわれている。主催しているのは、障害のある子どもの母親で、8年前に始めたもの。「障害者だけの活動にしない」という動機が盛り込まれており、資料によると、平成20年10月の会員数は80名（障害者24名、その家族19名、地域の方37名）となっている。年に1回コンサートを市民会館などで開いている。

歌の先生にリードされ、みんなで歌う。最初は、声をだそうということで、「雪やこんこん」など2曲をピアノ演奏でオクターブを替えながら、繰り返し歌う。始めはじっとしていた人も繰り返し歌ううちに、笑顔になり、自分なりに声をだしていた人、休みのところはわかっていて声をださない人、間の手を入れる人、身体を揺らす人など、それぞれのやり方で参加していた。その後、課題曲2曲を練習。パート別の練習をした後、休憩。飴が配られた。

後半は、今まで歌ってきた曲の中で、みんなが歌いたいといった曲を次々に歌う。Dさんも自分の好きな曲をリクエストしていた。手を挙げて、すぐに曲目を言える人もいるが、手を挙げて「何歌う？」と聞いても応えられない人もいて「じゃあまた思い出したら言ってくれますか」と、参加者の気持ちも受け止めながら対応し、安心できる場であった。

夜の遅い時間にたくさんの参加者がいて、地域の人もいて、驚いた。でも参加してみて、なごやかで楽しく、参加したくなる人の気持ちがわかった。歌うって楽しいな、音楽っていいなと感じた。Hグループホームであと2人、このサークルに来ている人がいる。他のメンバーも、木彫り、大正琴、演劇などのサークルに参加している。

#### 「新年会もあるよ。みんなでお酒を飲んで、楽しいよ」

Dさんはさらに、もうすぐ地域の新年会があり「みんなでお酒を飲んで、楽しいよ」と言うので、後日私も参加した。会場は、公民館。各グループホームでおかずを1品ずつ作ってもちより、配膳する。Hグループホームは、おでんの分担で、支援者が夕方から作っていた。

全員で40人ぐらいの人が集まった。6人用のテーブルが7つあり、そのうちのひとつのテー

ブルに地域の人が座っている。地域の人の参加は、3家族。うち1家族は子ども3人連れで来ていた。その他、職員で地域住民の人が2人いた。会が始まると、地域の人だけが自己紹介をした。ある人は、「昔は小さい子を連れてみんなもっといっぱい来たけど今でも、子連れで来ているのは私ひとりになった。グループホームの人には、いつもお世話になっている。草苳をしてくれたり、子どもの面倒をみてもらっている」と挨拶。別の地域の人に話を聞くと「もともとは東京暮らし。老後、いなかで暮らしたいと思って探していて、長野の〇〇に土地を見つけた。もともと障害のある人とつながりの多い土地だと聞いてきた。よいことだと思って来た。NPO 法人をやっている〇〇さんは、いろいろな企画をしてくれて、障害のある人とつながるきっかけを作ってくれている。月1回のうどんやそば作りにも参加している。楽しい。彼から一番学んだのは障害者が障害者に教えることの大切さ」と言う。

参加している人たちはDさんを含め、みんな楽しそうに食事をし、お酒を飲んでいた。はじめはグループホームごとに座っていたようだが、途中から他のテーブルにも移動し、地域の人たちとも話していた。後半は、支援者が企画した出し物やクイズをし、利用者や地域の人が答えて、景品をもらっていた。私のそばにいたEさんは、クイズに正解し、景品をもらったのがうれしかったらしく、ホームに帰ってからも何度も何度も「〇〇って答えて、これもらったよ」と誇らしげであった。他のみんなも景品をもらってうれしかったみたいで、ホームに帰ってからもうれしそうに私に見せ、新年会の話で盛り上がった。

思っていたより地域の人が少なかったが、地域の人や他のグループホームで暮らす仲間との楽しそうな語らいの場になっていた。ホームに帰ってからもみんな楽しそうにいろいろ話している姿から、それぞれが別々にでかけるサークルがあってもよいし、こんな風にみんなが一緒にでかける行事があっても楽しいなと感じた。

**「私は、起こしてっていわれるから、毎朝〇〇さんと△△さんを起こすし、お父さんは朝ご飯を並べてくれるのね」**

Hグループホームの人たちは、ゆるやかに役割が決まっている。Dさんは、「私は、起こしてっていわれるから、毎朝〇〇さんと△△さんを起こすし、お父さんは朝ご飯を並べてくれるのね」と言う。勤務時間が早く、起床も早いDさんに、「明日も起こしてね」とお願いする人が何人かいた。実際に、朝起こしていた。ちなみに私も宿泊した時、起こしてもらった。

またFさんのお父さんも、朝起きるのがとても早いので、世話人さんが前の晩に作っておいてくれた全員分の朝食を配膳するという役割ができていた。みんなからも「お父さん」と呼ばれて親しまれていた。また別の利用者のGさんはいつも台所をきれいにしたり、ゴミをきれいにしていた。当番ではなく、好んでやっているようだった。

朝ご飯を食べるのは、みんなばらばらで、自分の出勤時間や送迎バスに間に合うように食べていた。

ゆるやかに関係を取り、協力しながら、暮らしていた。もちろんちょっとしたことで口論になる場面もあった。お父さんもごくごく自然に受け入れられ、溶け込んでいた。

## 「仕事がない時も、家でくつろぎたくない」「〇〇学園にボランティアに行って、洗濯や掃除をした」

Dさんの仕事は、ホテルでのベットメイキング。勤めた当初は、6部屋ぐらいしかできなかったが、今は12～13部屋をこなす。しかし状況によって、ホテルの仕事も少ない時がある。「ホテルで仕事がない時も、家でくつろぎたくない(じっとしていたくないという意味と思われる)。それは寂しい」それで、「近所の〇〇学園(障害者施設)にボランティアに行って、洗濯や掃除をした。またやりたい」と言う。

仕事がないから家にいるというのではなく、さまざまな工夫をして活動場所をさがす支援が行なわれている。Dさんにとっても仕事がない時、ボランティア活動があるというのは安心材料になっているようだった。

### Hグループホームの人たちに出会って・・・

この地域の「地域の人と障害のある人とのつながり」は、質・量共に豊かで、特別なものを感じた。やはり30年前、地域の人にも会員になり、1,000円ずつ出し合って、入所施設を作り、その後すぐに自立ハウスという現在のグループホームのようなものを作って、障害者の地域生活を支えていった歴史の重みを感じる。施設周辺の地域に住んでいる職員もいて、その家族が子どもを育て、近隣の人とつながることからも地域の人とつながっている。また、障害のある人とつながりたい人たちが、わざわざ土地を買って引っ越してくる例もあった。その意味では特別な地域と思う。

地域で生活する障害のある人と地域の人が交流する会やサークルがたくさんあって、Hグループホームの人にもそれぞれ好きなものに参加している。月に一度のうどんやそば作りには多くの人が参加しているが、趣味的なもの(歌、演劇、木彫り、バスケットボール、大正琴など)はそれぞれ好きな人が参加していた。そしてそのことがそれぞれの暮らしの楽しみになっていて、利用者の人たちはとても豊かに暮らしていた。

また、地域とのつながりのみならず、利用者に対しても、既成の枠に囚われず、利用者からニーズがでてくれば、それに応えていく支援の姿も伺える。例えば、このホームに住むFさんのお父さんは、さまざまな事情から私的契約で、グループホームの住人となり、すっかり溶け込んでいた。またDさんに対しては、仕事が減っても、ボランティア活動を促し、安心感を与えるなどである。

## <支援者から>

ここは私の地域生活のイメージを作ってくれた原点かなって思います。

このホームを通過した人はいったい何人いるんだろうかと思えます。ある意味では県内で地域を超えたシェルターの存在であった時代も思い出します。

グループホームってこんなイメージだねって、今はぼんやり見えるけど本当にそうなのってここを訪れると思ってしまう。

一人ひとりが、いろんな物を背負ってここにやって来る。

ここは、地域だから当たり前前に地域の人とは関わる場所だよって教えてくれる。

特別なメニューは存在しない。それは歴史が当たり前にして来たから。

このホームで生まれた人はいないけど、このホームと一緒に育った人はたくさんいる。

成長して都会に出て、またこの地域に戻って来た人もいる。

こんな地域が好きだから移り住んだ人もいる。

同じ地域に根を置いた支援者もいる。

ここから一人暮らしを始めた人もいる。

一人暮らしに疲れたり、病気をしてゆっくり過ごしに訪れた人もいる。

ここで最後の時を迎え、天国に召され皆さんに見送られた人もいる。

当たり前が難しい。

でも、当たり前前に地域の方と一緒に旅行へも行く。

一緒にお酒も飲む。

一緒に歌も歌う。

特別に皆とリズムを合わせることもない。

でも、助け合うこともある。

当たり前を感じながら暮らしが続いていく。

こんな地域を皆で作って来たんだね。長い道のりであったと思うけど、時間だけでは作れなかった。なぜって思ったら、訪れてみて下さい。

そんな場所がここにある・・・・・・・・・・。

### 3) オリジナルな生活空間・作業空間をもつ人たちの暮らし

今回の調査で、地域の人とのつながりを持ちながら生活している人の様子を、具体的にうかがうことができた。しかし、その人たちは、比較的障害の軽い人であった。それでは、障害の重い人たち、言葉のない自閉症の人たちの生活はどのように保障されているかを次に紹介したい。

#### S ケアホームの人たちの生活空間

ホームを訪ねると、まず支援者と一緒に玄関の鍵を開けて入る。平屋作りで、玄関の正面に食堂兼居間があり、隣はお風呂と洗濯場、左右に4部屋ずつ居室がある。自閉症の症状のある男性7人が生活。

支援者が「お客さんですよ」と言うと、なんとなくみんな居間に集合し、支援者が私を紹介してくれる。事前にケアホームから頼まれて送ってあった私の写真が食堂にはってあり、私が「これは私です」というがあまり反応はない。支援者が一人の男性に声をかけ「部屋をみせていただけますか」と声をかけると、「いいですよ」といってみせてくださる。部屋は整理されているが、雑誌が積まれていたり、洋服がたくさんかけてある。テレビと棚と机だけのきちんと整理されている部屋もあれば、ちらかっている部屋もあって、一人ひとりの個性がでていた。全く部屋には何もなくて、電気をつけて、カーテンをあけ、窓のほうを向いて、服をさわりながら、独り言を言い続けている人もいた。また別の人の部屋を少し覗くと、その人は、テレビの音量をかなりあげて、それを見るでもなく、立ったり座ったりしながら、ずっと紐を（まるで上に独楽があるかのように）のぼしたりちぢめたり、持ちかえたりし続けていた。また、廊下をあっちこっち歩きながら、小さな声でしゃべっているような、歌っている様な声を出し続けている人もいた。「こんばんは」と挨拶するが反応はなかった。このHさん（20歳代 男性）の日中活動を次に紹介してみよう。

#### Hさんの作業空間

このメンバーの中のHさんが通う日中活動は、ケアホームから、車で15分程の所にある。創作・散歩などの活動を行う生活介護事業所である。この事業所に通う人のほとんどは自閉症の症状があるため、一人ひとり専用のブースのようなものが設けられていて、一人ひとり全く違う創作活動を展開している。

午前中は多くの人が創作活動を行ない、昼からは、昼寝をしたり、散歩に行く。私が到着したのは、昼過ぎで、多くの方はバスで散歩にでかけるころだった。午後作業をやり続けた人は行くとのこと、この日、午後作業を行っていたのはHさんを含めた4人だった。

事業所の一角にHさん専用のブースがあり、机と椅子が置かれていた。机の上には、真ん中に縦5マス、横6マスに区切られた専用のボードがあった。その横には、大きな粘度の塊が置

かれていた。Hさんは椅子に座ると、大きな粘度の塊の粘度を少しちぎっては、丸め、尖った竹串で、まず真ん中に穴を開けた後、ちょんちょんと二つ目をかき、「しゅっ」と線をひいて、顔のような粘土玉を仕上げる。できたものを板のマス目の中に置いていく。いくつか作ると立ち歩いて、また戻っては作業にとりかかる。作業する机のそばには、出来上がった丸い粘土玉がたくさん入っているダンボールが置かれていた。

<Hさん専用ブース>



<作業のための専用のボードと粘土の塊 (右)>



※縦5マス、横6マスに区切られ、中に粘土玉を置くようになっている

<Hさんが作った粘土の玉:顔のように見える>



<ダンボール箱いっぱいの粘土玉>



別の人は、こたつのような物の枠組みの上に、大きな洗濯用のクリップで麻布を止め、毛糸で刺繍をして、タペストリーを作成していた。まずは自分でマジックで下絵をかき、(確認していないが多分職員が)麻布をセットする。自分で書いたマジックの下書きのうえに、まず今から自分で縫うと決めたところだけを黒くぬり、そして毛糸ばかりでどンドン毛糸を縫っていく。そのようにしてタペストリーに仕上げていく。だれも手順を教えたわけではなく、この方が独自に考えたやり方だということ。

<タペストリーを作っていた人のブース>



<絵を描いていた人のブース>



### HさんやSケアホームの人たちに出会って・・・

重度の自閉症の人であればあるほど、個別の部屋、個別の日中活動の空間が必要であることを痛感した。逆に個別の生活空間、作業空間があれば、落ち着いた暮らしができることを痛感した。個別の部屋であることで、物をキッチンと片付けなければストレスを感じてしまう人、糸をずっと動かしながらさわっていたい人、テレビの音量を大きくつけていたい人などなど、一人ひとりのいろんなこだわりが、保障され、それぞれがそれぞれの空間で、そのこだわりを存分に発揮しながら、問題なく過ごすことができる。そのことが精神の安定につながっていた。

日中活動では、こちらから「〇〇という作業をさせる」という発想ではなく、一人ひとりの好きなこと(例えば粘土いじり、毛糸で縫う、色を塗る、絵を描くなど)を見つけ、それをどう活動にしていくのか。そのためにどのような補助具を考案すればいいのか、そしてできたものをどのように作品や製品として仕上げていくのかというセンスが、職員に問われている、と感じた。この日中活動の場は、障害者の生活介護事業所というよりも、数人のアトリエが集まった場所という感じで、作業中も集中している心地よい空気が流れていた。

## <支援者から>

さあ、自由にして下さい！が苦手な皆さんも「地域暮らしていこう」の実践ですよ。特別支援教育の中にも、しょうがい者福祉サービスの中にも、様々なところで専門療育の取り組みがやっと始まったのかなあと思う反面、暮らしをイメージした実践はこれからなんだろうなと感じています。

誰もが同じように、地域で暮らすことをイメージした取り組みなんですね。

出来上がって来たメニューは、決して最初から始まったものでは無かったし、「違う！」と混乱や行動で訴えた一人ひとりを見つめて・感じて・試して作られた活動であり、環境なんだと思います。誰一人無意味な活動は無い。結果を周囲がどうアートへと橋渡しするかの柔軟なイメージ作りを意識し、一番ご本人が良かったねと評価される瞬間につなげたい願いがそこにある。

変化に弱いスケジュールの情報は、どう伝えれば良いのかの疑問を繰り返し、満足できたと思える活動で、「今日はゆっくり眠れるな」とリズムを刻めたのかを感じ取る毎日。

安心して眠れる環境ってどんな空間なんだろう？

きれいな花が飾ってあるとか、大好きな物が置いてあるとか、それぞれ違いがあっご本人には安心できないものにもなりかねない。

安心できるお手伝いってどんなふうにしたらいいんだろう？

言葉では受け取れないメッセージから、地域で安心して暮らすことの保障を問いかける場所なんだと思います。

こんな仕組みが足りないんだよ！って、たくさんの方たちが叫んでいるのは、みんなが知っていることなんですよ。

[コラム]「決して特別な暮らしじゃないけど・・・」

・年か前、入所施設の職員をしていた頃、地域生活移行の担当をしていた。

自分の中では最も地域で暮らしてほしいと考えていた利用者さんがグループホームで暮らすことを希望された。嬉しかった。

敷地内で自活訓練を行った。建物を見学した。世話人さんにも会ってもらった。ホームの周辺がどういう所か見て回った。

けれどアセスメントは甘かった。

そして、いよいよ入居する方達を決定する期限がきた。

その利用者さんは、入居されることを拒んだ。

グループホーム、地域で暮らすことの魅力を伝え切れなかった自分を恥じた。何故か？

入所か地域か？

施設かグループホームか？

魅力的な地域生活？

ということではなかったんだと思った。

もちろん住む場所や建物を選択できることはとっても重要だ。でも、もっと重要なことを伝え忘れていたと思う。

それは、「決して特別な暮らしじゃないけど、その方が望む暮らしや暮らし方を選べることができる」ということを説明できていなかったからだと思うし、体験してもらうことができなかったからだと思う。

何年か経って今、その方はグループホームで生き生きと、しかし、坦々とした日々を送っている。

誰がそのことを伝えてくれたのかな？

ありがとう。

### 第3部 人間関係を作るのは本当はしんどいけど、まちで人と接するのはやっぱりいい

ここでは、もう一度、一連の取り組みの原点に戻ってみたいと思う。支援者や研究者の言葉ではなく、当事者の言葉や語りに、出来るだけこだわってみたい。

もちろん、当事者から話を聞き出す主体は調査者であるし、当事者の語りの中から重要だと思うものを抽出して整理するのも調査者である。それでも、当事者の生の語りをそのまま聞き取って記述する作業を通して、当事者が暮らしや人生の主体であるというあたりまえのことが鋭く突きつけられる。

本文では、当事者の語りの前後に調査者の解釈を加えていない。ただ、他の部と同様に、文末には調査者の所感と支援者のコメントを付している。

## 1) 30年間の入院から戻って自由な時間を味わう暮らし

Aさん 60代女性。入院歴トータルで約30年。単身で生活中。自分の意見ははっきり主張する。

### ■ 私

- \* 長野から都会に働きに出た。事務の仕事だったけど忙しかった。
- \* 都会では美味しいものも食べた。都会の暮らしをしてたんだけど、調子が悪くなって長野に帰って病院に連れていかれて、そのまま入院になった。
- \* 今は病院から出て、昔のところに帰ってきて暮らしている。近所の人には昔から知っている人たち。

### ■ 病院

- \* どうして入院になったのかわからない。急だった。大変だった。
- \* 嫌だったんだよ、入院は。なのにずっと出れなかった。
- \* でも、退院したいって私は言わなかった。
- \* 病棟で慣れるのにがんばったからね。
- \* でも病院ではやることはなかった。ただ食べて寝たんだ。病院の中でなんかやったこともあったけど、あれはやることじゃなかった。
- \* 私は毎日、病院にいただけ。病院は薬を飲ませて入れておくところだった。
- \* 病院にいたから病気が治らなかったんだよ。
- \* 先生が「退院したいか」と聞いたから「出してください」って言った。自分の考え。もう病院に戻されるのは絶対に嫌。

### ■ 退院して

- \* 今、退院したからゆっくりしてるんです。
- \* 病院ではやることがなかったけど、自由じゃなかった。
- \* ここでは、やることがないけど、入院中とは違う。
- \* やることがないのが自由ってこと。
- \* 編み物、ずいぶん数が増えた。
- \* 年はね、若くないけど40代。(注 入院時期20数年はカウントされていない)
- \* ここにはヘルパーさんたちと〇〇さんが来るかな。
- \* 静かでいいよ。

## ■ でも

- \* 山の中だからね、静かすぎて寂しいよね。
- \* 姉が遠くからくるんだけど、もっと泊まっていけばいいのに。何ヶ月もいたらいいのに。無理かな。
- \* 誰か泊まりにこないかな。知っている人と一緒ならいいけど。誰でもいい訳じゃない。
- \* 散歩もするんだけどね、何もなくて寂しいところだからね…。
- \* 生クリームケーキ、食べれないんだよね、ここじゃ。また持って遊びに来てよ。
- \* 喫茶店まで行くかって？…いいよ、ここで待ってるから買ってきてよ。
- \* 10個くらい食べたいな。
- \* 美味しいもの、食べるのっていいんだよね。…ここは、何もなくて寂しいところだし、店から遠いんだよ。
- \* 足がないとどこもいけないからね。
- \* ヘルパーさんはよくしてくれてるよ。近所の人でも前から知ってるし。でも、さみしいんだよ。

### この方にお会いして

Aさんが現在、ひとりで暮らすその家は一軒家で、ずっと以前にご家族が住んでいた家だった。山間部の、本当に静かな地にその家はあって、隣家も見えないけれど、人の気配は感じられない環境だった。

しかし、Aさんにとっては安住の場であり、家族との思い出もある大切な場所。退院して戻ってくるのはそこと決めていたようである。近隣の人とは全く関係がないわけではない。人里から離れた土地で、Aさんの存在がどう映っているかは不明だが、つかず離れずのほどよい関係を保っているのは、以前そこに家族がいたことも影響しているのかもしれない。

往診、訪問相談、ホームヘルプと、必要な支援をフルに利用しながら、退院後の暮らしにAさんは集中していたのではないだろうか。「ゆっくりしてるんです」という言葉がとても印象的だった。長期入院の疲れを癒す時間とも受け取れた。

支援側にとっては忍耐の連続だったかも知れない。しかし、基本的な暮らしを週5日のホームヘルパーさんが身近で支えたうえで、彼女のペースを最大限尊重してきたのだと感じる。そこが最大の支援のポイントだったのだと思う。

Aさんははっきりと自分の意見を言われる方だった。それも彼女の強さだった。「美味しいお茶を煎れてあげる」と、お姉さんのおみやげという緑茶をいただいた。本当に美味しかった。病気も症状もあるけれど、その前に、食べることや話すことが好きで、嫌なものは嫌という彼女の性格に出会った。なお一層、そんな彼女がこんなにも長い入院が必要だったのかと疑問に思う。

彼女のペースで、無理せず、ゆっくりとした関わりをする中で、Aさんは「寂しい」と感じるまでになったのだと思う。自分から「誰か泊まりにきてくれないかな」と他者の関わりを求める発言を自らしたことは、無理に誰かを受け入れさせることと天と地ほどの差がある。彼女の選んだ土地を拠点に、彼女が今後どのような暮らしをされるのか楽しみである。いつか、町中の喫茶店で美味しいケーキを食べられる日が来るのではないかと思いつつ、それを決めるのは彼女自身であると思わせられた出会いだっただ。

### <支援者から>

長期入院者の退院後の地域生活支援に関わり、地域生活が始まると、ご本人は日増しに元気に、たくましくなっていく様子がとても印象的だった。退院に向けて、関係者の中には退院は困難と言う人もおり、退院後もいつまで続けられるかと本人より支援者が不安を持っていた。

退院を困難としている要因として、本人の出来ないことや地域の出来ない事に目を向けてしまうことがあるのではないかと感じている。私の関わった方も、地域の資源が少なく、本人は病識がない、服薬できない、清潔を保つことが出来ない・・・と出来ない事を見つければ次々とでてくる。しかし、本人の出来ることに目を向け、その力をどう生かすか、その為の支援体制をどう組むかという視点を持つと、希望が見えてくるのである。

その希望は、本人のものでもあり、支援者のものでもあった。本人ニーズに基づく支援をすることで本人も支援者も共に成長していくことができることを、支援を通じて感じた。

地域生活は色々なことが起きる。心配することはたくさんあるが、良いことも悪いことも色々あるのが当たり前！それが地域で生活することだと感じている。

何か起きることは仕方がなく、その責任をなすりつけ合わず、リスクに対してそれぞれがどう連携し、協力できるかということが必要である。そして、本人が地域で生活する中で力をつけ、入院中とは見違える顔をしていくことが支援者を変え、地域を変えたように思う。

数年後の生活を、本人も支援者も楽しみに出来る支援をこれからもしていきたいと願っている。

## 2)「名前で呼んでくれる」近所の人に花を見てもらう喜び

Bさん 50代男性。入院歴約15年、入所施設2年。ケアホームで生活中。話好きで愛想もよく、自分の思いを率直に話す。

### ■ 長くて忙しかった

- \* お酒飲みすぎちゃって入院した
- \* 早く出られたらいいなあと思ったけど、なかなか病院から出れなくてね
- \* 病院には年寄りがいっぱいいて職員もたいへんだったんかな「やってくんねえか」って
- \* 忙しくなったよ、オムツ交換とか、洗濯とかさ、仕事、いっぱいあってさ
- \* お年寄りのお世話に忙しかったんだ、出たかったのに…
- \* 俺の部屋は8人部屋で、畳に布団だったよ
- \* 布団敷いたとき、これぐれえあくんだよ（指で20センチくらいを表現）、布団と布団の間がね、これが大事だったんだな
- \* ずっと病院で働いていたら、やっと出れて、そしたら施設に行った
- \* 病院はね、そうとう長かったよ、50才になってた

### ■ 困っちゃったよ

- \* 施設でさ、待ってたんだよ、空きをね、よその施設かな、病院かな
- \* 1人暮らしをやりてえなあって思ってたけど、空き待ち
- \* 施設じゃ3人部屋だったけど、やっぱり1人部屋の方がいいよ…うん、いいよ
- \* 施設では、しいたけやったり、アスパラやったり、草取りやったり、忙しかった
- \* 土をいじるのは嫌いじゃなかったけど、あんまり無理しないようにしたよ
- \* 兄貴夫婦が面会に来て、ホームに行くことになったんかな
- \* そしたらホームに早く行きたくて行きたくてさ、困っちゃったよ
- \* 俺は短かったよ、施設は。1年ちょっとで出られたからね

### ■ 団地での暮らし

- \* ホームは団地にあるんだよ（1階だから）庭もあって、空き地の前だから花植えてる
- \* きれいだよ、いろいろ植えてさ、いろんな花をつくるのが好きなんだ
- \* グラジオラスってさ、あれ1メートルくらい伸びるんだよね。球根植えて、6月にね、下から咲いていくんだよ、知ってる？

- \* 団地の人とか通る人がさ「きれいねえ」とか「何の花？」とか言うんだよ
- \* だからさ、もっと花を増やして、きれいにしようと思って、少しずつ増やしてるよ
- \* 団地ではね、清掃活動に出てるよ。下水道そうじも。
- \* みんなね、俺のこと、名前で呼んでくれる
- \* 盆踊りのときとかに、近所の人と花の話もするんだ
- \* 近くの小学校で屋台がでるときはお昼ご飯食べに行くんだよ
- \* 施設じゃ3人部屋だったけど、やっぱり1人部屋の方がいいよ…うん、いいよ
- \* 家（団地にあるホームのこと）には、会社の人や友達がくる。将棋をやるよ、1時間半とか。強いんだよ、俺。たまにわざと負けてやるんだよ。せっかく来てくれるからさ。

## ■ 俺

- \* 花が好き。近所の人にきれいねって言われるのが好き。
- \* 団地のホームが好き。1人部屋が好き。お客さんがきて、一緒に将棋もできる。
- \* CD買うのが好き。演歌歌手で好きな人がいる。
- \* 週末のレクレーション（プログラム）は、行きたいのに行く。カラオケなら行く。強制じゃないから行かなくてもいい。
- \* おこずかい、そんなに使わない。今は欲しいテレビがあるから、使わないようにしてる
- \* 旅行好き。会社で北海道にも行った。日帰りでみかん狩りにも。
- \* 普段は、近くの公園に行ったり、そば食べにいたり、楽しいこといっぱいあるよ
- \* 金曜日はね、ホームでノンアルコール飲むんだ。お酒は飲みたいときはあんまりないな

## ■ 夢

- \* 昔さ、結婚してたんだよ。別れたけどね。
- \* いま、また彼女ができたよ
- \* 彼女の年は知らないけど、見た目が若いよ
- \* カラオケと一緒にいたりしてる
- \* 結婚は…そうだな、どうかな。1人暮らしもやりてえなって思ったりもしてる
- \* ホームの世話人さんに料理教わってさ、やってみてえな
- \* 病院も施設ももう帰りたくない
- \* もうすぐ60才だけど、いろんなことやってみるよ
- \* 花がいっぱいきれいに咲いてるところをさ、見に来てほしいな、みんなに

## この方に出会って

とにかくよく目が動く、気がつく人だ、というのが最初の印象である。話をしながらもこちらの飲み物や周囲の様子を何気なく見ていた。そしてこちらの質問に適確に返答していた。

どうしてこの人が15年もの時間を精神科病院で過ごしたのか。最後までわからなかった。彼のように実は病院や施設の中で重宝がられ、労働力として時間を奪われた人がどのくらいいるのだろうか。

もうすぐ60才の彼にとって、働き盛りの時期を病院と施設で過ごしたことは言葉にはならない。彼自身は恨み・つらみを口にしなかったが。

しかし、そんな彼さえも受けれてくれる地域の懐はすごいなあと思う。花を通して近所の人とおしゃべりしてしまう彼のもつ魅力もさらにすごいと思った。

彼に会って、彼の存在が団地でも貴重なのだと確信した。人間関係が希薄な昨今、地域生活を楽しみ、人間関係を創る才能をもった彼が、彼の周囲を変えているに違いないと思ったのである。

彼のように貴重な人材がまだ入院、入所しているのかも知れない。なんて大きな損失だろう、と、彼に会って一番感じた次第である。

支援者に恵まれた、という見方もある。しかし、その支援者を魅了したのは彼なのだ。

もっともっと楽しい人生を送ってほしいなあ、またぜひお会いしたいなあと思っている。

## <支援者から>

最初にこの方と出会ったのは行政からの依頼だった。行き場所がない彼の支援を打診されたのである。

生活歴を見ると、精神科入院、入所施設入所、そしてアルコールの問題や人間関係の課題など、なかなか手強そうな印象だった。

しかし、実際にお会いすると「環境を変えて地域で暮らしたらいけるかも」という気持ちも出てきて彼の支援を始めた。問題もないわけではないけれど、長く入院・入所をしてきた彼の環境を変えてあげたいという思いがあった。

ショートステイから始まって、住まいの確保、昼間の居場所を探した。

結果的に、昼間通う事業所では、理事長さんと彼のウマが見事に合い、彼は自分の強みを生かし居場所としていった。また、グループホームの世話人さん（男性）がいい関わりをしてくださり、団地での暮らしでの人間関係が広がっていった。そして市のケースワーカーさんが熱心に関わってくくださったことは大きかった。彼に関わる人の輪がみごとにひとつとなって彼の生活が支えられているのだと思う。

最初に目にした、記録や情報という紙に書かれたものではわからない面がたくさんあって、問題ばかりが強調されていたことは、今思うとなんだっただろうという気もある。

彼自身、気を遣って一生懸命やってきた。ひとり暮らしの夢を叶える手伝いをしていきたいと思う。不遇だった環境、無駄にした時間を思うと、ぜひ夢を叶えてほしいと願わずにいられない。

### 3) 退院して家族との絆を取り戻した

Cさん 50代男性。入院歴約20年、地域での生活12年。グループホームで生活中。自分から話すタイプではなく口べたであるが、穏やかに話す。

#### ■仕事は苦じゃない

- \* 鉄鋼会社で、鋳型を作る仕事をしていた。
- \* そのうち会社が傾いてきちゃって、仕事を変えないといけなくなった。結局、次のところも、その次のところも、つぶれちゃって。
- \* 自分が行くところいくところ、どうしてこう（傾く）なっちゃうんだろって…。
- \* 仕事に行くのは苦じゃない。
- \* 人を相手にする仕事より、1人でできる仕事が好き。接客とか苦手だな。

#### ■入院と通院

- \* 精神科に入院になった。まず、閉鎖病棟に1年ちょっと。それから開放（病棟）。
- \* 開放（病棟）になったのに、外に出ることができなかった。買い物にも行けなかった。
- \* 病院では時間が過ぎるのが遅いんだよ。
- \* 看護婦さんが（退院支援をする）支援者を紹介してくれて、（地域での）ショートステイをすることになった
- \* ショートステイは散々やったな。お父さんが（退院に）すごく反対だったんだって。後で聞いた話だけ。
- \* 最初は車に乗るのすら怖かったよ、ずっと病棟にいたから。自分は免許もってるのにね。でも、すぐに慣れたけど。
- \* 退院してグループホームに入ってから、タクシーで通院してる。片道1500～1600円くらいかな。
- \* 診察は5分。薬を待ってる時間は長いんだよ。早くて50分。
- \* 今、（精神科の）ドクターはね、「もうどこも悪くないから、薬だけ飲んでいて」って。
- \* （精神科以外に）他にも通院しなくちゃいけないところがあるんだけど、そっちの受診も時間がかかるんだよね

## ■ わたしの生活

- \* 受診の日以外は仕事してる。1人でできるような仕事ね。
- \* 買い物に行くのが好き。1人で行く。
- \* 行く前に、新聞の(折り込み)チラシを見て、安くてほしいものを探すんだよ。お店に行つてチラシを見せて「これ、どこにあるの？」って聞いてね。
- \* 安いお店をあちこち回ったり。特売のチラシに載ってたのに、売ってなかったときは買わずに帰ってきた。安いのをね、チラシで調べてから行くんだ。
- \* 市内循環の安いバスを使う。(精神保健福祉)手帳を見せれば半額。運転手さんは手帳を見せたら「あー」って言ってくれる。手帳を開かなくてもいいんだよ。
- \* たまに外食もするよ。寿司が好き。回転(寿司)も普通の店も行く。うーん、値段の違いは「シャリ」だと思うんだよね。
- \* 酒は飲まない、アルコール類、一切ダメ。
- \* 甘党なんだよ。どっちでもいいけど…やっぱりショートケーキよりは饅頭かなあ。
- \* 10年ひと昔、って言うけど、それ以上(退院してから)経った。病院とは、時間の感じが違うよ、感じ方がね。

## ■ 雪かき

- \* (長野では)雪かきしなくちゃいけない。
- \* 近所の人から手伝いを頼まれることがあって、1日に何度もやったこともある。
- \* クリニックからもね、頼まれたりしてたんだ。たくさんの雪を河原まで(同じ障害をもつ)仲間と捨てにいったりね。それが終わった頃に、また降って来ることもあるんだよ。
- \* でも、雪かきして膝を悪くしちゃって…それからはやってないけど。
- \* 膝悪くして、歩けなくなったんだよね、受診のとき、病院まで。前は1時間ちょっと歩いていたのに。だからタクシー使うんだよ。
- \* 近所のひとに挨拶するよ。
- \* 今年は雪が少ないけどね、3月だって雪が降ることもあるんだよ。雪かきしないとね、地域ではね。

## ■ 宝くじ

- \* いつかひとり暮らし、って思うんだけど、これ（お金）がね
- \* 宝くじをいつも買ってるんだ。大当たりすればいいのになあ。大きいのがねえ。
- \* 今は1回10枚買う。1000円とか3000円とかは、結構あたるんだけどね。
- \* この間も大家さんに宝くじを全部見せたんだけどね、一桁違いでダメだった。
- \* 18歳のときにね、初めて買ったんだよ。で、1年くらいで1万円当たった。30年も前の1万円って今と（価値が）全然違う。
- \* 明日のことがどうなるかわかってる人っていないでしょ？だから買うんだよ。いつもそう思ってね。入院中は買わなかったけど。
- \* もしも1億円当たったらね、テレビのコマーシャルでやってるでしょ？顔の長い俳優さんが出てる…ああいうコマーシャルに出てくるような家がいいな、住みたいな。
- \* 土地を150坪買えばさ、100坪ちょっとの家が建てられる。
- \* 前後賞もあるからね、いつも住宅の新聞チラシ見てるんだ。
- \* 近くに市民病院みたいのがあったら、その近くがいいかな。風邪ひいたりしても、そういうときいいからね。内科とか揃ってるから。
- \* でも、大きな道路の際は嫌だな。長距離トラックとか突っ込むところを見たことがあるんだけど、事故がいやだからさ、通りの角とか際とか嫌だよ。
- \* テレビでやってたアンケートだと、宝くじの使い道の1位は貯金だって。で2位は家を買う。もし1億円当たったら、の答え。
- \* 自分は、気の合う人には（1億円当たったら）分けてやろうと思う。気が合わない人は、あげても「もっとくれ」って言うに決まってるからね。
- \* 会（今、支援を受けている団体のこと）には世話になってるから寄付する。だってあの人たちいなかったら、自分はどうなっていたかわかんないもの。
- \* あー、当たらないかなあ、大きいのが！

## この方に出会って

入院生活 18 年と地域生活 12 年、どうしても比べがちになってしまうが、この方にとっては、比較できない一つの人生なのだと思う。

昔は乗っていた車を怖いと思うくらい、閉ざされた空間での生活は彼にとって必要だったのだろうか。

病院に何度も足を運び、ショートステイを繰り返すなかで、“地域に戻る”、そして“地域で暮らす”ことが支援されてきたことは、彼にとってかけがえのない出来事に感じられているようだった。

新聞等と一緒に届くチラシは、スーパー、家、車といった類がより分けられて収納されており、彼のスタイルを映した暮らしぶりが垣間見られた。

地域から雪かきを頼まれることは、彼にとっても誇らしいことのように、出来なくなった今もその出来事を話してくれた。

いつでもブラッと街に出られる環境は、彼にとって非常に居心地がよく、何かと決め事が多くなってしまいがちな共同生活の中にも、きちんと個人の自由度が保障されていることが大切なのではないかと思う。

宝くじや家について、“いつか夢は叶う”ことを心待ちにしている彼の表情は印象的で、夢を語れることは、どこで生活しているのか、どんな生活をしているのかよりも、ずっと重要であるように感じられた。

## <支援者から>

彼の退院に当たって、頑なに反対するお父さんの存在が大きかった。血相を変えて反対するお父さんは怖さも感じるくらいの迫力だったが、お父さんへの不思議な興味もまた支援者は感じた。決して悪い人ではないと感じたので、時間をかけてお父さんの安心を得られるまで関わることにした。そのためにショートステイが何度も続いたのだが、その結果、お父さんがとにかく話を聞いてくれるようになったのだ。

そんな折、ある保健師さんから複雑な家庭事情を聞き、お父さんの悩みや苦しみを知った。結婚した他の子供への気遣いでお父さんは素直に退院を喜べなかったのだ。

しかし、退院したあとは、息子のために雪の中、自転車でも1時間もかけてアツアツの焼き芋を届けてくれたり、寒くないかと毛布やオーバーを届けてくれたり…。亡くなるまで気にかけてくれた。お父さんの葬式には参列し、兄弟とも関係が回復し、今は兄弟が定期的に援助してくれている。事情があって、まだ彼にはすべて話していないのだが…。

兄弟のお嫁さんと会う際には、何度も頭の下げ方を練習し、きちんと挨拶していた人である。

町の中でちょっとぶらっと歩く彼の姿をよく目にする。買い物袋を下げて歩くその光景は、なぜか私たちにほっとする気持ちをもたらしてくれる、不思議な存在なのである。

#### 4) 見捨てない人がいたから、人と接したいと思えるように

Jさん 40代男性。入院は約10年。グループホームに入居経験もあるが今は単身生活中。地域での8年間はひきこもりがちだが、ぽつりぽつり話してくれた。

##### ■ 救われた

- \* 入院中はいいことなかったです。出たかったけど出れないんだと思ってた。
- \* そこに退院を勧めてくれる人が、外からきてくれて、僕は町に戻れた。あの人たちは、僕を救ってくれた。解放されたって感じかな。
- \* 不安もあったけど、僕は自由になりたかったから（病院を）出たんです。
- \* 生きていくのは大変だけど、病院にずっといるのはやっぱりね、よくないからね。
- \* 病院に（入院して）いると、いろんなことあきらめちゃう。よくないですよ。
- \* でも見捨てない人もいたんです。

##### ■ ひきこもりに専念

- \* グループホームに最初住んだんですけど、そこでトラブルがあってね。ホームの入居者ともめちゃって…。で、出たんです。アパートでひとり暮らしになりました。
- \* ひとりになったのはいいけど、憂鬱な気分になって。だんだん外にでなくなって。誰にも会いたくないし、どこかに行きたいとも思わなくなった。
- \* 退院したすぐあとは、買い物にも行ったし、40分もかけて歩いて出かけたりもできたのに。「あれを買おう！」って出かけられていた人が、もうね、出ること自体が面倒になっちゃってね。
- \* 自分の部屋にいました。じっとして、寝て、また起きて。息はしてたけど、他には何もしていない。怠けているように見えるけど、それで精一杯だった。
- \* 食事はね、1日に1回、玄関の前に運んでもらって。食べ終わったら扉のそとに置いて…。でも美味しかったですよ、ご飯。
- \* 毎日、ドアをノックしてくれて、それが合図でご飯を玄関まで取りに行く。それで生きてられました。
- \* 洗濯とか掃除とか助けてもらいましたけど、誰でもいいわけじゃなくて…いい人だと入ってもらいました。
- \* ここのスタッフさんは怒らないんですよ。いい人なんです。

## ■ お母さん

- \* お母さんがね、外でご飯を食べよう、って言うてくれて。近くなんですけど、外に出ることを決めてカレンダーに印をつけて…少しづつ、目を移してね。それがきっかけかな。
- \* いつだったかな、お母さんに「自分のこと、自分でやらなきゃいけないんだよ」って言われて、その通りだな、って思ったんです。
- \* それから自分で近くのグループホームまで夕飯を取りに行くようになったんです。
- \* ホームの人と話もするようになりました。みんないい人で。でもご飯は一緒には食べません。ひとりで食べるのは淋しい気持ちもあるけど。
- \* いつもしんどくなるのは人間関係なんです。そのホームにはそういう人（しんどくなる人）はいませんから、居心地いいんです。
- \* 次の日にお皿を持って行きます。洗っていけるときもあるかな、たまにだけけど。
- \* お母さんに食事を取りに行くようになったって話したら、「がんばんなさいよ」って喜んでくれた。嬉しかったですね。
- \* 妹がひとりいるけど、ずっと会ってません。今は、おふくろしかいないんです。

## ■ 気分が落ち着く

- \* 嫌なことがあると、電車に乗ってでかけます。東京が多いかな。もう5、6回行ってる。
- \* 新幹線じゃなく、列車で行くんです。
- \* 東京に行くと、気分が落ち着くんです。特にすることはないけど、ブラブラして、上野公園に行ったり…。泊まりはしません。
- \* 気分が落ち着いたら、帰ってきます。
- \* 最近行ってないな、イライラすること、あまりないからかな。うん、そんな感じですかね。

## ■好きな仕事をしたい

- \* ずっと前にね、レストランで働いたことがあるんです。ウェイターしてたんです。お客さんに「いらっしゃいませ」って言ったり、注文を取ったり。大変だったけど、仕事は嫌じゃなかったです。
- \* いつかね、またレストランで働きたいんです。東京の表参道みたいところでもいいですね。カフェでお客様の注文取ったり…。できるかな、僕にも。
- \* 自分の好きな仕事じゃないとだめなんです。
- \* 今、いい方向にね、向かっているような気がしています。一般企業で働きたいって思っているんです。貯金もしなくちゃ。

## この方に出会って

ホームのリビングでゆったりとくつろいでいるところにお邪魔した。あまりに自然で、ひきこもっていた人という印象は感じられなかった。実は、支援者以外の人が部屋に入ることは、今回が2回目だったという。

アパートの自室に案内してもらった。訪問者が来るということで、いつもは締め切って絶対に空けないという窓2つを、朝から空けて空気を入れ替えていたのだという。まだかなり寒さの残る中、長い時間にわたって窓を開けていたそうだ。また、いつもは支援者がしてくれている部屋の掃除も、くるくるローラーを使って掃除してくれたのだという。私が訪問することは、本人さんにとって一大イベントだったと思った。

彼の人生は、紆余曲折を経ている。入院中には歩行すらしなかったのかも知れない。地域でも、ひきこもりという状態が長く続いているが、その間も映画を見に出かけたこともあったし、買物もしていた。全く外界との接点を絶っているのではない。

調子が悪くなると絶っていたのは、人間関係なのだ。しんどいことを避けてひきこもっていたことは、時間はかかったけれど、変化につながった。

そして「人間関係がしんどい」と話す彼が、いつかまた接客業に携わりたいと願っていることは、むしろ本当は、もっと様々な人と関わりたいと思っているのではないかとさえ感じられた。

彼に対して18年間にわたり、関わりを続けてきた支援者の存在が彼の人生に大きな影響を与えている。支援者の“どんなことがあっても見捨てないから”というメッセージは、彼の中で大きな支えになっているのではないだろうか。そして、同時に無理に踏み込むこともしなかった。

一人の人生を支えるということは、並大抵のことではない。でもだからこそ、これは機械にはできない温かみのある人によってのみできる仕事なのだと思う。精神障害者でなくても誰かにこんな風に支えられたら、やはり人生が変わるかも知れないと思わされた。

## <支援者から>

Jさんに関わってすでに18年になる。入院前からの関わりで、入院前に症状が出て、トラブルを起こしたこともあった。入院してからも、本人、家族との関係を継続し、常に連絡を取り続けた。

10年間の入院中、お盆にはおはぎ、クリスマスにはケーキ、バレンタインデーにはチョコレートを持って毎月定期的に面会を続け、「あなたを見捨てないからね」と伝え続けてきた。地域で支えられなかったことを反省しながら、彼がまた地域に帰って、自分らしい暮らしをしてもらいたいと願っていたのだ。

10年かかった。やっとの退院。グループホームで彼をお迎えした。

生活が始まったものの、10年もの入院で、彼は正常な歩行が出来なくなっていることがわかった。奇妙な歩き方をしていた。

さらに幻聴・幻覚、被害妄想も残っており、些細なことで誤解も生じ、結局、2年半後にグループホームを出てワンルーム形態のアパートで新たな生活をスタートしたのだった。

ひきこもり状態になって、お盆で食事を運び、身の回りのことをお世話する形になった。一時は恐怖心が出て関われないような状態になったこともあったが、4年を過ぎたころ変化が見られるようになった。

根気よく関わる中で支援者との信頼関係が生まれていたようで、彼が食器を洗って持ってくるようになったり、最近は食事を取りにもくるようになったのだ。

家族との関係も良くなり、ときどきお母さんと外出するまでになった。何より嬉しいのは、ご飯を取りにくるときにグループホームの入居者と楽しそうに会話をする光景が見られるようになっていること。彼なりの、安定した生活になっているのだと思う。

支援者もこの間、交替もあったが、彼は一度築いた信頼関係のもと、複数の支援者とも関係をもっている。

18年ほど、行ったり来たりのところを、家族とともに関わってきて、彼の居場所を彼が見つけられたことを確信している。今後も彼の仲間作りを応援したい。

## 5) つらいことはあっても、今が一番楽しい

Tさん 40代女性。入院歴約5年。地域での生活、約10年。現在はグループホームで生活。気を遣いながら、溢れる思いを語ってくれる。不安も強そうではあるが、しっかり自分の思いを語れる人である。

### ■ 退院できるとは

- \* 願ってはいたけれど、退院できるとは…半信半疑だった
- \* 病院で「退院してみないか」って今の支援者に言ってもらって、「したいです」って言った。
- \* 5年のブランクがあるから不安だった。地域の人に障害をもった自分がどう見られるか不安だった。退院のときも半信半疑だったんです。
- \* ショートステイからしてみないかって聞かれて。すごく薄暗いところでしたんです。
- \* でも一緒に支援者が泊まってくれてね。楽しかったです。
- \* 退院したら自由です。

### ■ 家族

- \* 私の母は入院中も惜しげもなく病院に通ってくれた。地味なお母さんだけど、焼いてきてくれるおやきが美味しかった。
- \* (同じ病室の) お部屋の人にも差し上げて、っていつも6個焼いてきてくれた。
- \* 退院してからもホームには年に2、3回会いにきてくれて。
- \* 気分転換にもなるし、気兼ねなく会えるからって、外のショッピングセンターで待ち合わせたことも。
- \* 入院中、私はお母さんに自由に会いたかったんです。
- \* でも、しばらくして母は亡くなった。相次いで父も亡くなってね。
- \* あんまり辛いんで、こっそりちょこっとお酒をね、飲むようになったな。
- \* そして薬を飲まなくなると3ヶ月入院もしました。

### ■ もうひとつの家族

- \* 娘がいるんです。でも離婚で別れてしまった。それが発病の原因。
- \* もう17年会ってない。22才になったはず。もう私のことは覚えてないと思う。
- \* 大学も出たって教えてもらいました。
- \* 私は障害者だからね、会っちゃいけないんですよ。そう思って…。
- \* でも、やっぱり会いたい。いろいろあったけど、娘には会いたいな。

## ■ 今の暮らし

- \* ヘルパーの資格取ってね、3級、2級って。資格取るのは、そりゃあ大変だった。でも援助に入りました。家事援助にね。
- \* でも膝を悪くして今は行けない。タクシーで通院してる。補助具も買ったり。ぜいたくできない、医療費がかかるから。
- \* 外食もしないようにして、余ったご飯でおにぎり作ったり、お金を使わないように。
- \* 母がこつこつ貯めてくれたものがあるけど最後の切り札としてとっておくよう兄弟に言われてね。だから生活保護、取れないんです。
- \* 近所の人とはよく挨拶します。回覧板をグループホームに持ってきてくれて。
- \* 近所の人、用事があるとふらっと来て扉をあけて声をかけてくれるんです。
- \* 大家さんもよくしてくれて。すぐ近くにいるんだけど、ホームのクリスマス会にも来てくれる。
- \* 草取りやゴミ捨てのお手伝いをしてあげたら、「ありがとう」ってこっそり 100 円くれるんですよ。だから私はスーパーで特売見つけたらですけど、イチゴを差し入れます。大家さん、イチゴが大好きなのよ、って喜んでくれるのが嬉しくてね。
- \* 今、大家さんのところに娘さんが里帰りしているけど、私たちみたいな障害者が近くにいたりするのはどうなんかなあって…気にしてるんですよ。
- \* グループホームには女性がひとりだからちょっとしたときに困るな。背中がかゆいときとか。湿布を貼るのもね、頼むのも恥ずかしいし。いつも世話人さんに頼むのも気がひけて…。
- \* 男性陣は私がいないと話さない。だから仲を取りもつというか、少しづつ話すようにしてね。最近は話すようになったかな。
- \* ホームで気も遣いますよ。
- \* 大きなお風呂になったのは幸せ。
- \* 病院とは違う、自由なんですよ。

## ■ わかちあう存在と出会う

- \* 娘のことを思うと辛い。でも辛い思いをしているのは私だけじゃないんだって、この会（グループホームをいくつか運営している団体）に入ってよくわかった。
- \* なかでも私の話をよく聞いてくれる Z さん（同じ障害をもつ）という人に会えました。
- \* 私の辛さをわかってくれて、ときどき二人で晩酌して。ビールは高いから発泡酒ですけど。2人で一缶でね。世話人さんも知ってるんだろうな。
- \* 娘が会いにきたとき結婚してるのを知ったら辛いと思うから、Z さんとは結婚しません。
- \* いいパートナーとして、一線越えずにつき合ってます。
- \* 「何にもしてあげられないけど」って一緒にいてくれて。「今日もふたりともがんばったね」って乾杯してるんです。…今が一番楽しいですね。

## この方にお会いして

話し始めてすぐに娘さんに対する感情があふれてしまわれた。つらい思いを引き出してしまったが、“ストレスが溜まっていて、おかしくなりそうだったので話を聞いてもらえてよかった”と話された。話すことはつらいことだけど、それを聞いてもらえる誰かがいないことは、もっとつらいことなのかもしれない。

同居者、支援者、地域の人らにたくさん気を遣いながら、生活されているが、それでも“今が一番楽しい”と話されることには、どんな意味が込められているのだろうか。

パートナーとの晩酌は、ストレスの多い生活のやすらぎとなっており、日々の支援よりも大きな意味が持っているように思えた。

扉の鍵をしないという物理的環境だけでなく、近所との開かれた関係ができるには、どのようにすればいいのだろうか。

女性ならではの悩みもまた、共同生活が生むマイナス面ではあるかもしれないが、日々の生活に折り合いをつけることは誰しもがやっている普通の暮らしのように感じられた。

## <支援者から>

初めて彼女に会ったとき、病院の相談室で大きな身体を丸め、「退院したいんです。でも精神に障害をもっている私を地域の人が受け入れてくれるでしょうか？不安なんです」と言った。遠慮しながらもはっきりと話した。生活習慣病もあり、支援側も不安がなかったわけではないけれど、彼女の退院とその後の生活の支援を始めたのである。

地域での最初の晩、布団を並べて寝た。その際に、別れた娘さんへの思い、不安と期待の入り交じった今後の生活への思いなどを語り合ったのを覚えている。

しかし彼女は地域に自然にとけ込んでいった。もちろん彼女自身の努力が大きかったが、ボランティアを含めた多くの支援者が常にいたことも大きい。何よりも地域の住民が、普通に声をかけてくれ、留守中の花の水やりやペットの世話なども頼まれるようになった。

彼女の退院を一番喜んでくれたのが母親だった。お母さんのためにも、と地域で頑張ってきた彼女だったのだが、そのお母さんが亡くなり、またお父さんも間もなく他界されてしまった。辛い中で彼女は「親の介護ができなかったから他人の介護をしたい」とヘルパーの資格を取り、今、誰かの役に立つ喜びを感じているように思う。

病状の波は今もあり、いろいろなことはあるけれど、彼女なりのペースで歩んでいる。

〔コラム〕ただふつうに地域で暮らしていきたいだけ

標題のフレーズは、西宮で地域自立生活支援に長年関わり、自らも脳性麻痺当事者である玉木幸則氏の言葉だ。平易な言葉で説得力あるフレーズである。だが、「ただふつうに地域で暮らす」といっても、その場合の「ふつう」をどう考えればよいだろうか。そのことを考えるための視点や要素は、国際的に共通するものとしてかなり以前から示されている。スウェーデン人のベクト・ニリエ氏が提唱した、「ノーマライゼーションの原理」がそれである。

- 1 ノーマルな一日のリズム
- 2 ノーマルな一週間のリズム
- 3 ノーマルな一年間のリズム
- 4 ノーマルなライフサイクル
- 5 ノーマルな自己決定の権利
- 6 生活している文化圏にふさわしいノーマルな性的生活のパターン
- 7 生活している国にふさわしいノーマルな経済的パターン
- 8 生活している社会におけるノーマルな環境面での要求

(ベクト・ニリエ著『再考・ノーマライゼーションの原理』現代書館より)

これはニリエ氏が1969年に提唱し、亡くなる直前の2003年に手直した「ノーマライゼーションの原理」で示されている、「ノーマルなライフパターンにあたる項目または局面」である。

ニリエ氏が、このような要素を提示したのには、どのような背景があったのだろうか。当時のスウェーデンでは、「知的障害のある人の暮らし」は、管理された施設の中にあるのが「ふつう」だったのだ。ニリエ氏は、人間としての存在の尊厳の、根源的なところに立ちかえって、知的障害者も「人としてふつうに地域で暮らす」べきであることを提唱した。彼の提起は、その時代の世間一般にこびり付いた知的障害者の生活に対する「ふつう」の認識と異なる内容であり、容易に受け入れられない。だからこそ、ニリエ氏は「ふつう」の中身を具体的に規定する必要があった。それから40年後のスウェーデンでは、今やニリエ氏の示した「ノーマライゼーションの原理」が、障害者支援において目指すべき「ふつう」の基準となっている。

このニリエ氏が提唱した「ノーマライゼーションの原理」は、既に1970年代の前半に、日本にも紹介されており、多くの人がその重要性を認識しているはずである。しかし、どういふわけか日本の福祉現場においては、ニリエ氏が示した原理と、現実の支援との間に大きな乖離が生まれてしまった。今、人としての生活のあり様を根本的に問い直すことから、具体的な支援のあり方を見直していかなければならない。

## 補稿 「そもそも」に立ちかえって、地域生活移行を考えてみる

### 1) 地域生活移行と地域生活（支援）の当事者による評価

本会は、昨年度も同プロジェクト（平成19年度厚生労働省障害者自立支援調査研究プロジェクト「知的障害者及び精神障害者の地域生活支援推進に関する研究」）に申請し、採択された。昨年度プロジェクトでは、入所施設から地域生活へ移行した当事者を、現在の住居や日中活動の場に訪ねて、移行後の生活について聞き取り調査を実施した。

その結果、入所施設から地域生活に移行したことに対する当事者の評価は、「入所施設よりグループホームの暮らしがいい」というものがほとんどであった。確認出来る限り、入所施設に戻りたいと言う人はいなかった。

しかし、必ずしも移行後の生活を「良し」とはしていないことも明らかになった。例えば、移行後の生活における人間関係を束ねてみると、入所施設の人間関係に集約されそうなケースや、個人に対する「管理」はかえって強化されている場合もある。また、移行先については、大半がグループホームであるが、その住環境については、個人の生活の場の整備と「発展する住欲求」への対応については大きな課題があると言わざるを得ない。今後に向けて、暮らしの膨らみをもたらす支援のあり方が、課題であることが明らかとなった。

そもそも、地域生活移行は、移行して終わるのではなく、当事者自身が自らの生活を組み立て直していく出発点でしかない。そして、地域生活移行の目的とするところは、支援者によって生活の大部分が管理された生活から、当事者自身が望むの生活の有り様を、当事者自身が組み立てていくあり方に転換していくことである。

しかしながら、当事者自身が自らの生活を組み立てていけるように支援することについては、支援者自身が自らの行う支援のあり方を見直し、意識を変えていく必要がある。

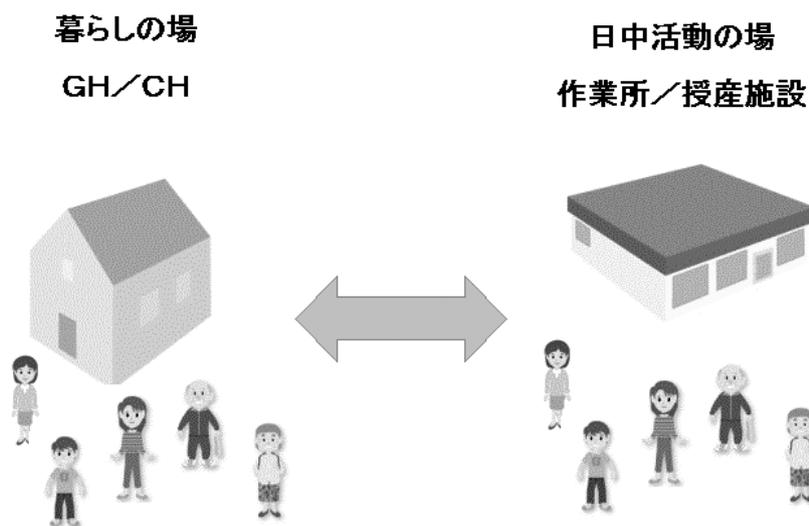
今年度調査では、現地調査と同時進行で研究会議を実施し、そもそも「地域生活を支援するとはどういうことか」という主題について、現場の仕事を客観的に省察していく試みを行った。ここでは、主に研究会議を通して整理された課題を軸にしつつ、調査で得られた所見をよりどころにして、そもそも地域生活移行を支援するとはどういうことか、地域生活支援のあり方はどうあるべきか考えてみたい。

## 2) 「暮らしの場と、日中活動の場をセットで用意する」とはどういうことか。

入所施設から地域生活へ移行する際に、「暮らしの場と、日中活動の場をセットで用意する」ことが必要であると言われる。また、暮らしの場と、日中活動の場に加えて、余暇支援を入れて「3点セット」と言われる場合もある。しかし、こういったことが必要であると言われるのは、本質的には何を意味するのだろうか。

かつての（今でも）入所施設での生活は、入所者の生活を丸抱えするところに特徴がある。暮らしの場も、日中活動も、余暇の支援についても、全て入所施設が責任を持って管理していると言って良い。これは、入所している当事者からすれば、自らの生活が一元的に管理されていることを意味し、個々人の希望に応じる多様性も乏しい傾向がある。自立支援法の施行により、制度上は、暮らしの場と日中活動の場の支援が分けられることになったが、実態としては根本的な変革が図られているわけではない。

さて、ここで全国に展開されたグループホームでよく見られる光景をイメージしてみよう。



この図で示したように、同じグループホームに暮らすメンバーが、同じ日中活動の場に通っている例がかなり多くのグループホームで見られる光景ではないだろうか。

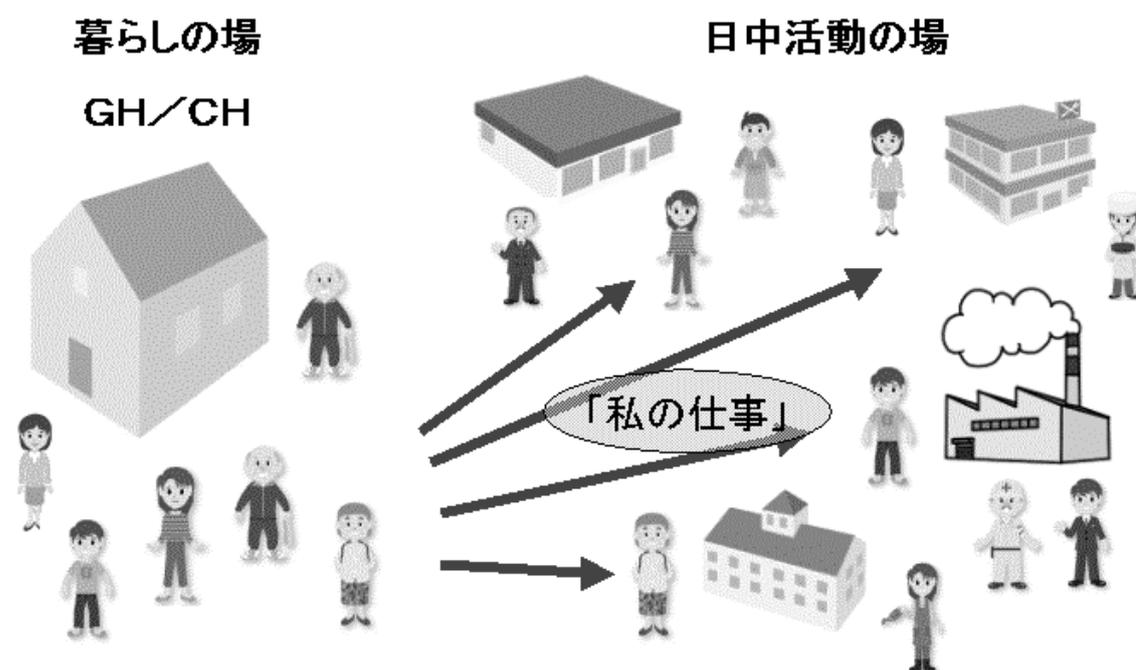
朝は、概ね皆そろって日中活動の場に向かう。そして、「例外的」に、1人はアルバイトやパート、実習という形態で、一般企業に出勤するのである。さらに、暮らしの場も、日中活動の場も、同一法人で運営されており、支援者側も極めて一体的である場合が多い。このようなグループホームでは、「(入所)施設とあまり変わらない」と言う当事者に出会うこともあった。

まず、提起してみたいのは、この状態が当事者の希望を丁寧に聞いた結果、出来上がったものかということである。つまり、当事者の希望を聞いて、当事者の生活圏にあるあらゆる社会資源の活用を見当し、さらには社会資源の開発まで試みた結果であるかということである。そ

のような経緯を経た、本当の個別支援が行われているかということ、問い直してみる必要がある。多くの場合、支援者が自前で提供出来るサービスを当事者に提示し、そのなかから選択することを迫っているのではないだろうか。

さらに、この景色が地域の側からみて違和感がないか、地域になじむ（とけ込める）風景かということである。つまり、このような均一にパッケージ化された暮らしの形態は、地域から見て違和感の大きい異質な光景になってはいないだろうか。これは、当事者自身が自分の生活の中で、独自の人間関係や社会関係を取りもって、地域に根を下ろしていけるかということに関連してくる。

今年度の調査では、地域における多様な暮らしのあり方が紹介された。そのような事例では、先述のような暮らしの場と日中活動の一体化はあまり見られなかった。これをグループホームに限定してみると、以下の図のように、同じホームに暮らす人の日中活動の場が、個別に用意されているところに特徴がある。

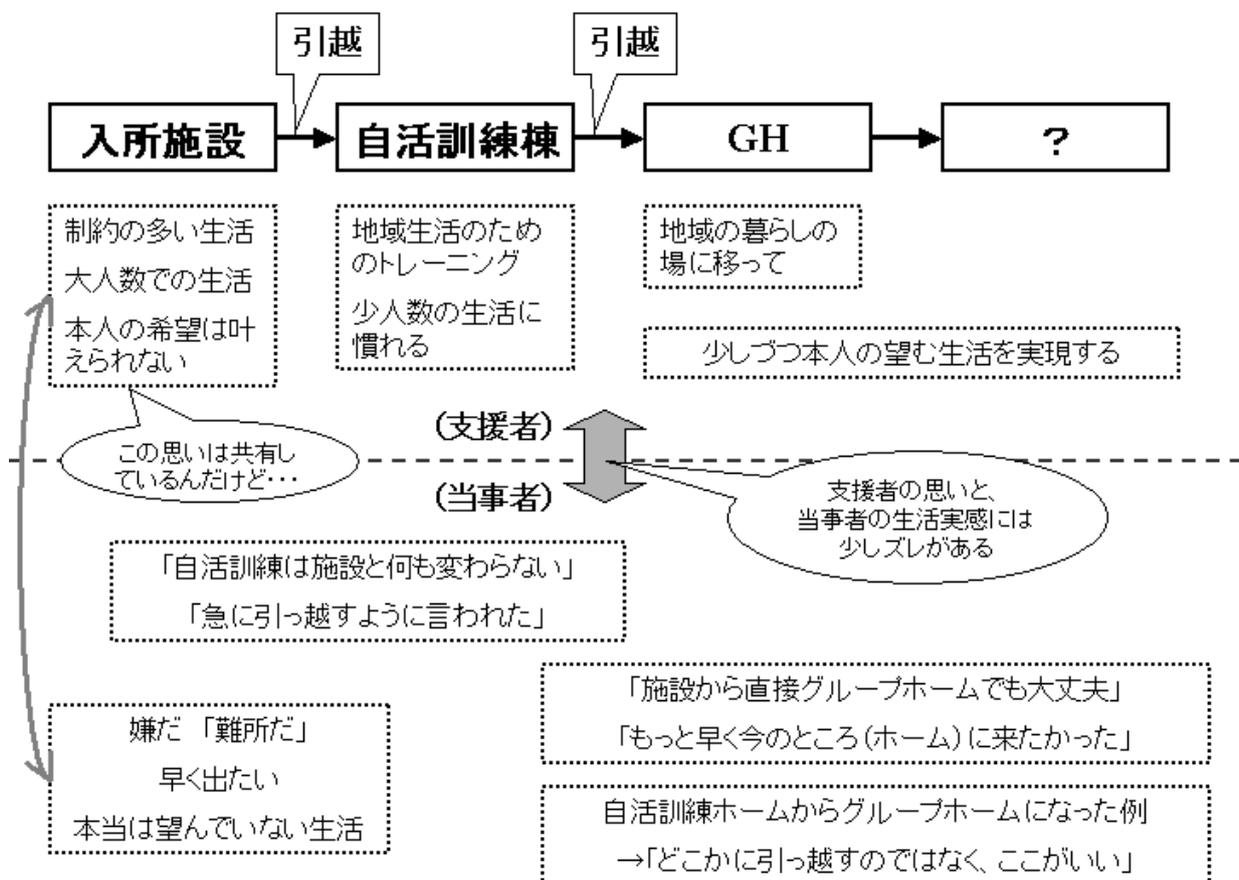


そして、当事者に「あなたの日中活動は？」と聞くと、「私の仕事は・・・」と誇らしげに語ってくれる。同じホームに住んでいても、「あの人とは違う、私の仕事」が意識されていることが窺われる。また、社会資源の少ない地域で、やむを得ず同一法人で暮らしの場と日中活動の場の提供を行っている場合でも、小規模の事業所を地域に分散させて、多様な職種や活動場所を作り出す試みが見られた。さらに、それぞれの日中活動の場で、暮らしの場とは異なった人間関係や社会関係が営まれていることが窺われるのである。

### 3) 「入所施設から段階的に地域生活に移行する」とはどういうことか

昨年度調査で、入所施設から地域生活への移行過程について、当事者の評価があまり高くないことがわかった。特に「自活訓練」については、確認出来る限り、「良かった」「必要だった」と評価している当事者はいなかった。その一方で、現在の生活については、程度の差はあるものの概ね評価されていることも共通している。ここでは、移行過程の支援はどうあるべきだろうか。また、当事者の評価の低かった「自活訓練」は必要とされているのか、見当してみたい。

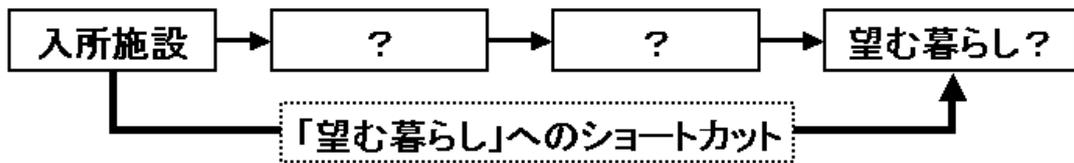
移行過程としては、まず入所施設から、同じ敷地内か隣接する場所に設置された「自活訓練棟」に移り、そこからグループホーム等へ移行する過程を取る場合が多い。当然、その間には、住まいの引越があり、当事者は主体的に引っ越すのではなく、「引越をさせられる」という感覚が強い。支援者としては、「大集団の生活よりは、個室が確保出来る自活訓練棟に早く移行してもらいたい」とか、「一度に閉ざされた生活から、地域の生活に移行するより、段階的にトレーニングを積みながら移行した方が、スムーズな移行ができる」という、「配慮」があるのだろう。しかし当事者からすれば、一種のフローチャート従って、当事者はベルトコンベアーのように流されているような感覚しかもてていないことが窺える。



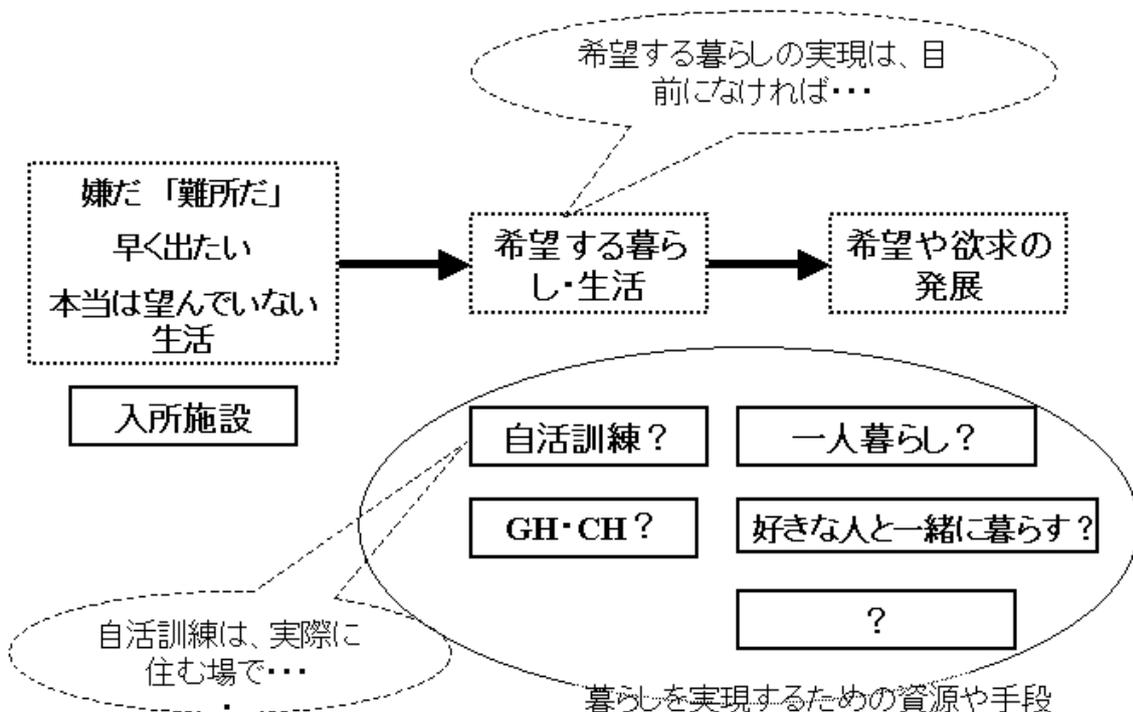
昨年度調査では、「自活訓練」を経由した地域生活への移行について、「自活訓練は施設と何も変わらない」とか、「施設から直接グループホームでも大丈夫」や、「もっと早く今のところ（グループホーム）に来たかった」といった当事者の語りがあった。

また、今年度調査では、地域中に設置された自活訓練棟で、入居していた当事者の「どこかへ引っ越すのではなくここで住みたい」という希望により、そのままグループホームに転換された例が見出された。この例を詳細に見ていくと、まず設置場所が、入所施設とはかなり離れた、地域の集落の中に設置されていたことがある。そして、それぞれの利用者によって、地域の中で自身の生活が展開されはじめていた。

つまり、地域生活移行に際しては、当事者の望む生活を、できるだけ目前で実現していくことが求められているのである。「いつか」とか、「将来的には」ではない。



当事者が「希望する暮らし」は、目前でかなえられていかなければならない。低められたり、極度に制約されたりした暮らしの中からは、あきらめは出てきても、希望や欲求の発展は導き出されないのである。そして、自活訓練が必要であれば、それはこれから先、暮らしていく場所で行われなければならないだろう。



#### 4) “本当の” 個別支援を目指して

今回の調査と研究会議をとおして、支援者が当事者の生活のあり様に対して抱く「良心」が“くせ者”ではないかとの提起があった。入所施設では、平穩に生活が流れていくように、入所者の「間違っただけ」行動が起こらないように、入所者を正しい方向に導くことが仕事だった。結果的には、入所施設における支援は、当事者の望む生活を組み立てることを支援するというよりは、施設の管理上望ましいと思われる方向に入所者を適合させていくという傾向が強くなる。ある入所施設の勤務を経験したことのある支援者は、地域生活支援でもつい世間的に見て「正しい」と思われる姿から外れていないかといった視点で当事者を見てしまうことがあると語った。

入所施設には、入所者の生命を預かり護ることが期待されるという側面がある。入所施設から地域生活に移行した後も、支援者は自らに対するそのような期待に拘束されているのではないだろうか。また、その期待は、当事者から寄せられた期待でない。

地域生活移行が本質的に意味するところは、当事者の生活を一元的に管理する仕組みを変革する取り組みにある。そして、このような「当事者が一元的に管理される」－「当事者を一元的に管理」するという関係の呪縛から、当事者も支援者も解放されることである。「当事者が暮らしを組み立てる」－「支援者は、当事者が暮らしを組み立てることを支援する」あり方になっているかどうかは常に問われている。

長野県障害者地域生活支援研究会会員名簿

小林 彰	会長	ライフステージかりがね施設長
関 孝之		精神障害者退院支援コーディネーター
長峰 夏樹		長野県社会福祉協議会
福岡 寿		北信圏域障害者支援センター所長
宮下 智		明星学園総園長
山田 優		西駒郷地域生活支援センター
福永 佳也		大阪府立大学大学院
堀米 信一		長野県社会福祉事業団常務理事
片桐 政勝		松本圏域障害者総合支援センター所長
中村 彰		長野県知的障害者育成会副会長
松本 善雄		長野県知的障害者育成会会長
刈間 靖		長野県知的障害者育成会事務局長
大池 ひろ子		西駒郷地域生活支援センター所長
堀川 勝巳		夢工房福祉会常務理事
中村 美恵子		地域活動支援センター皆神ハウス所長
川崎 和廣		社会福祉法人信濃友愛会理事長
茅野 隆徳		さんらいずホール施設長
美谷 島越子		長野県社会福祉協議会
唐木 昭		上小圏域障害者総合支援センターコーディネーター
橋詰 正		上小圏域障害者総合支援センターコーディネーター
井本 達三		山の子学園共同村施設長
丸山 哲		ふっくら工房ふるさと施設長
北澤 克巳		穂高悠生寮施設長
杉田 義夫		佐久総合病院医療相談室
湯本 正美		上伊那圏域障害者総合支援センター
綿貫 好子		アトリエCOCO施設長
小島 健一		長野圏域障害者総合支援センター
花形 春樹		さくら会理事長
児玉 典子	監事	ハートラインまつもと事務局長
三田 優子		大阪府立大学人間社会学部准教授
竹端 寛		山梨学院大学准教授
杉田 穂子		立教女学院短期大学准教授
蜂谷 俊隆		関西学院大学大学院博士課程後期課程
宮崎 まさ江		長野県精神障害者地域移行支援研究会
勝野 孝志		長野県精神障害者退院支援コーディネーター
松井 陽介		諏訪地域障害者自立支援センターオアシス
川崎 昭仁		諏訪地域障害者自立支援センターオアシス
龍野 克利		長野県社会福祉協議会
多賀谷 寿美		長野県社会福祉協議会



**「知的障害者及び精神障害者の  
地域生活支援推進に関する研究」報告書**

発行：長野県地域生活研究会（会長 小林彰）

発行日：2009年3月

本冊子は、平成20年度厚生労働省自立支援調査研究プロジェクト  
「知的障害者及び精神障害者の地域生活支援推進に関する研究」の成果物です。

地域で  
暮らしていこう

